

ツアラトウストラ、その他^た Zarathushtra, E.T.C.

作・演出 萬野 展

登場人物

- 高木 不審死を遂げた男。探偵。(萬野)
連城庸子^{れんじゆうよしこ} 医師。(杉山)
岩田有人^{ありひと} 医師。庸子の父。故人。(有原)
石神京子 図書館司書。(宮崎)
小山慎二 救急救命隊員。(高橋)
海老沢久治^{えびさわひさじ} コラムニスト。(一村)
瀬田薔薇(セダ・バラ) 占星術師。(酒井)
布施祥太 大学生。(涼原)
江間勝子^{えまかつこ} アパート管理人。(桜)
大槻静 看護婦。(野澤)
金沢信明 医師。(早矢仕)
岩田澄江 庸子の母。故人。(石田)
連城昇一 澄江の弟。庸子の叔父。(倉橋)
田代雄二 マルチ商法の男。(斎藤)
高橋直人 医師。(松山)
村岡霧子 心臓病の少女。(小倉)
中沢一恵 電話の女。(阿部)
異世界の住人・アシャ／アシャワン／セフル／カラパン／スバコ
子供達・1 / 2 / 3 / 4 / 5
葬儀場の人々・1 / 2 / 3 / 4 / 5 / 6 / 7
神官・1 / 2 / 3 / 4

【注記】当脚本の著作権は萬野展が保持する。当脚本の無断上演を禁ずる。

あふ、曠野、人稀なり。
空しき墳墓に屍を争ふは、豈禽獣のみかや。
我もまた離脱せし屍を求めて、
月下を流浪す。
なふ、我は 生き人か。死に人か。

夢幻能「無明の井」多田富雄 より

子達5人(男児4女児1)

- 子1 じゃあ僕お医者さんね。(聴診器を持っている)
- 子2 あたし看護婦。
- 子1 ジュンちゃん看護婦ね。
- 子3 僕は？僕は？
- 子1 シンヤくんなにしたいの？
- 子3 えつとねーえつとねー注射したい。
- 子1 じゃあ先生の助手にしてあげます。
- 子3 助手だー助手だー。
- 子2 アブくんはなに？
- 子4 かつたりいよ、なんでもいいよ。
- 子1 アブドラくんはイラン人だから救急車の運転手にしてあげます。
- 子2 運転手だつて。
- 子3 いいなー。
- 子4 なんだよー、サベツかよーそれつて、ざけんなよー。
- 子1 大事な役目です。
- 子3 救急車いいなー。いいなー。
- 子4 おめーは注射だろ、注射してろよ。
- 子3 これ注射器にしようつと。(木の枝かなんか)
- 子4 聞いてねえだろお前。
- 子2 先生。コウイチくんが残ってます。
- 子5 …。
- 子1 なにがやりたいですか。
- 子5 …。
- 子1 なにが、やりたい、です、か。
- 子5 …。
- 子4 はっきりしろよ、お前はよ。(殴る)
- 子2 やめなよアブくん。
- 子4 イライラすんだよお前はよー！ 断食さすぞコラ！
- 子2 先生。
- 子1 はい。
- 子2 コウイチくんはこの場所に入る秘密の入り口を見つけたので、いい役をやらせてあげたいです。
- 子1 なるほど傾聴に値する意見です。
- 子4 お前ホントに子供かよ。
- 子5 …。
- 子1 大病院ですから立派な機械がたくさんあります。コウイチくんは最高級スーパ―電子医療機器です。
- 子5 …。
- 子3 それ何するヒト？

子1 患者の状態を音で知らせます。ポチ。(ボタン押す)
 子5 ぴっ。ぴっ。
 子1 大事な役目です。
 子3 いいなー。
 子4 ぴーぴー言ってるだけじゃんか、どこがスーパー…いてーな、やめろよ！
 子3 注射しました。麻酔です。
 子4 運転手に麻酔すんな！
 子1 はいはい、静かに。それではこれから手術をします。
 子2 はい。
 子4 運転手出番ないじゃんかよ！
 子1 みんな位置について。
 子2 はい。
 子3 はい。
 子5 ぴっ。ぴっ。
 子4 先生。
 子1 なんですか看護婦さん。
 子4 患者さんがいません。
 子5 ぴっ。ぴっ。
 子1 では救急車が事故にあつて運転手が怪我をしたことにしましょう。
 子4 おい！ あ、痛て、やめろよー。(無理やり寝かされる)
 子2 先生、危険な状態です。
 子5 びび、びび、びび、
 子4 なんだよー、サベツかよー、これだから日本人はよー…
 子1 すぐに手術です。暴れないようにおさえてください。
 子4 暴れないように…麻酔しろよ！
 子3 さつきしたもんねえ。
 子1 麻酔が効いていませんね。もう一度しましょう。
 子3 じゃあねー、今度はねー、鼻の穴にします。
 子1 では看護婦さん、鼻の穴をおさえてください。
 子2 はい。
 子4 やめろー。
 子5 ぴっ、
 子1 おやおや、これはいけませんね、これはブタバタ病です。
 子4 そんな病気ねーよ！
 子1 このままだと死ぬので、鼻の穴の両方から薬を注射しましょう。
 子2 はい。
 子4 やめろー。うがー。…
 子5 ぴっ、ぴっ、…ぴー
 子1 死にました。
 子4 殺すな！
 子3 死んじゃったー死んじゃったー！
 子2 なーむ、なーむ、なーむ…
 子5 ぴっ、ぴっ(泣きながら)

喪服 (はじめて薄く笑う) いいわ、君にあげるから、大事にして。

喪服女退場。
子達、集まる。

子2 お葬式だった。
子3 ソウシキだー、ソウシキー。
子4 お前わかってないだろ。
子2 誰か死んじやっただんだね。
子1 ここに住んでたヒトだったさ。
子5 ぴっ。
子3 ぴー！
子4 うるさいなお前ら。
子1 ポチ。(ボタン押す)
子3 ぴぴぴー！
子4 お前はダメレ！
子5 ボク知ってるよ。
子達 …。
子2 なにが？
子5 お母さんから聞いた。ここ、病院だったんだ。
子4 ホントかよ。
子5 おじいさんのお医者さんがずっとひとりやってたって言ってたよ。
子達 へえー
子1 じゃあ、そのお医者さんが死んじやっただんだね。きっと。
子2 お医者さんも死んじやうんだあ…

仮面をつけた黒尽くめの葬列者達10人現れる
子達を囲むように動く
子達退場する
仮面の葬列者による弔辞

葬列者1 岩田先生、先生には本当にお世話になりました。私が子供の頃、心配性の母は、私が咳をしたとか下痢をしたとか普段より目が赤いとか、そんな些細なことを言つてはここに…何度もこの岩田診療所に私を引っ張ってきましたね。先生はあまりにも何度も足を運ぶ私たちにうんざりした顔もみせず、いつも丁寧に私を診察してくださいましたこと、よく覚えています。私は最初は先生のが怖かった。あまり笑わず、じっと母のとりのめのない話に耳を傾けていた先生の姿が、今でも私のなかのどこかに残っています。母の訴えるような恐ろしい病気でなく、たいていはただの風邪だった私に、先生がいつも出してくださいました、シロップ入りの薬…あの懐かしい甘さも…。

葬列者2 岩田先生には、父の臨終を看取っていただきました。父は近所でも有名な頑固者でしたが、先生にだけは信頼の心を寄せておりました。思えば父が他界する三年前、父が八十歳の時でしたね、父が先生に極秘の手術を頼んだのは。それがどんな手術だったのか、父は最期まで私達には口を閉ざしていました…。先生も頑固だった。私達家族が何度お尋ねしても、先生は父がいつたいなんの治療を受けたのか、男と男の約束だからと言っておっしゃってくださらなかった。父

が脳溢血で他界した後、父の書いたものを見てはじめて私達はそれを知ったんです。それが包茎の手術だったこと。「死ぬ前にこれだけはと信頼する医師に極秘治療を依頼す、治療成功、もはや思い残すことなし…」今でもそのことを思い出すと笑ってしまいます。その「極秘治療」をなさっている先生の真面目くさった顔を想像すると。先生……、とうとう父との約束を、守り通してくださいましたね…。

葬列者³ 岩田先生、覚えていらっしやいますか？ 僕のこと。十年前、大手の医療機器代理店の営業として、こちらの診療所にお世話になっていました。あの頃、バブルの真っ只中でしたね、動いているお金の額は信じられないほどのものでした。僕はきつと才能がなかったんでしょね。狂ったように稼ぎまくっている同僚から置き去りにされて、ひとり成績は低迷し、落ち込んでいた時期でした。そんな時でしたよ、こちらの診療所に飛び込み営業に来て、先生と知り合ったのは。はつきりいつて、なにひとつ買ってもらえそうになかったですよ。入ったとたんにわかりました。時代遅れの道具、踏み抜きそうな床、ガムテープで目張りした窓……。これはダメだと、瞬間的に思いましたよ。でも僕はその後、何度も岩田先生に会いにきました。先生の、ただの町医者とは思えない知識、先端医療に対する見識、先生の医者としての、いや、人間としての人柄に、僕は魅せられてしまったんです。先生はいろいろな話を治療の合間に僕にしてくださいました。お互いに釣りが趣味だったことがわかって、釣り談義で盛り上がりましたよね。一緒に釣りに行く約束は果せなかったけれど…僕はとうとう夢を叶えましたよ。あれから会社をやめ、今では釣具屋のオヤジです。

葬列者⁴ 岩田先生。先生は嘘つきです。医者なんて連中はみんな、患者のことなんか考えちゃいない、自分の業績や評判や、貯金や家のローンや、そんなことにかまけている世間の人たちと何も変らない。医者が聖職で、患者や世間から尊敬されるのは、医者たちがこそってそういうふうに出演してきたからだって…、診療が終わった夜、先生は窓際の椅子に座ってビールを飲みながら、カルテの整理をする私にいつもそうおっしゃっていました。俺達医者はそんな自作自演に自分達まで騙されて、自分のことを偉いと思ったり、自分達が感謝されて当然だと思ったり、何でもできるようなつもりになっているだけさ、って。そんなふうにおっしゃいました。でも先生。私は知っています。先生はそんな人じゃなかった。先生が結婚なさって、澄江さんが…奥様が診療所の手伝いをなさるようになってすぐ、私はこの診療所をやめました。今では二人の子持ちです。貯金や家のローンに頭を悩ませ、子育てにあくせくするただの平凡な主婦です。でも私は…この診療所の…岩田先生の最初の看護婦だったこと、今でも誇りに思っています…。

葬列者⁶ 外務省から参りました。ただしこれは私人としての参列であり、これから申し上げることも、過去を知る一個人としての弔辞であります。岩田有入殿。貴殿は過去、カンボジアにおいて、政府主管の医療協力事業に若くして参加され、当地において多大な貢献をされたことを、ここに深く感謝するものであります。…岩田さん、私ですよ。あなたとは、カンボジアの医療キャンプで、いつしよだった…。ふたりでトンレサップの湖畔で釣りをしたことを、今でも懐かしく思っています。若かったですなあ…あの頃は。岩田さんが、地雷で吹っ飛ばされた少年の片足から、何百もの破片を、たんたんと、表情も変えずに取り除いている

のを傍らで手伝いながら、こいつはいつたい人間か？　メスを持った機械かなんかじゃないのかと内心で毒つきながら、私はとうとう暑さに負けて気を失ってしまつた。気が付くと木陰のハンモックに寝かされていた。木の根元によりかかつて、タバコを吸っているあなたが見えた。あのときあなたの横顔を、今でも覚えてとります…。

葬列者6　センセ、ご無沙汰。ホントに久しぶりにこの町に来たわよ。なによ、全然変つてないわね。相変わらず煤けた町…。あたしの店のあつた駅裏の思い出横丁、さつき行つてきたわよ、なによあれ、なんであたしの店がパソコン教室になつてんの？　生意気そうなお子様たちが自転車で群れてたわよ、参っちゃうわね、実際…。あたしさ、先生がそんなに偉い先生だつたなんて、ちつとも知らなかつた、でも聞いたわよ、義理のお父さん、メチャメチャ偉い人だつたんじゃない。ホラ、医師会だか牛飼いだか知らないけど、お医者のお父さんで凄腕の権力持った人だつたんだつて、連城つて人。澄江さんのお父さん。先生もやるわよね、そんな人の一人娘強奪しちやつたんだからさ。義理のお父さんの家に養子で入つたら、出世なんか思いのままだつたんじゃないの？　かつこいつていうか、いまどきいいわよ、先生みたいなお馬鹿な人…。あら、お葬式の席でちよつとマズかつたかしら。…でもねセンセ、先生がもう五十近い頃よね、夫婦揃つてあたしの店に飲みに来てくださったの。…あたしも年取るわけよね、それ考えると…。あの頃、楽しかつたわ。今も昔も馬鹿多いけど、先生たちがたまに来てくれると、なぜだかあたしホツとしちゃつて、店閉めて三人で騒いだよね…。センセ、…：…そつちで澄江さんに会えたよね？　あたしも…：…そつち行つたらまた湿気^{シメ}た店出すからさ…：…また…：…飲みに来てね…：…。岩田先生。

葬列者1　先生。

葬列者2　先生。

葬列者3　先生。

葬列者4　このたびは本当に…

葬列者たち　ご愁傷さまでした。

喪服に腕章を嵌めた葬列者7・8（このふたりは仮面をつけていない）は、しかつめらしい顔をして舞台両脇に立ち甲辞に会釈を返している

派手な格好をした老人が葬列者の群れを縫つてうろついている

葬列者7（金沢）　…おい。

葬列者8（高橋）　…。

派手老人、遠慮無げな態度で葬列者の顔を覗き込んだり、あたりを見回したりしている。
興奮気味の様子。

金沢　なんだあれ。

高橋　知りませんよ。

金沢　なんとかしたほうがよくないかな？

高橋　ええ、まあ…

金沢　場違いだろやっぱり。

高橋 ……確かに。
金沢 高橋くん、ちょっと言ってきてよ。
高橋 ……。金沢先生行ってくださいよ。
金沢 なんてよ。
高橋 なんてつて、そりゃあ…
金沢 行きなさいよ。
高橋 ……。

高橋、しびしび老人に寄る。

高橋 あー！。

老人 ……あああ。

高橋 ……。

老人 おお！（なんか見つけた）

高橋 ……いや、あの…

老人 くうー…（なんか知らんが感無量）

高橋 ……。

金沢 （見かねて寄る）ちょっと…あのね、あのね、おじいさん。

老人 ……くく、く…く…く…（なんだかわからない）

金沢 お葬式だから。聞いています？

老人 ……。

金沢 ほら、みなさんお焼香してるでしょう？ お葬式。

老人 ……。

金沢 ね、だから静かに。

老人 ……。

老人、喪服の人々を見ている
喪服の人々は儀式っぽい流れで動いている

老人 おおッ！

高橋 わ。

金沢 びっくりした…。

老人 おおお…

高橋 しーっ…

金沢 おじいさん、ちょっと、静かに…

老人、ぱったりと倒れる。

金沢 あら。

高橋 ちょっとおじいさん？

先の裏庭の喪服の女（庸子）登場
老人、庸子を見る

高橋 連城先生。

老人 ようこ…

高橋 ……

老人 庸子…か…

庸子 ……

金沢 …… お知りあい？

庸子 (頷いて) ごめんね、金沢さん、ここはいいわ。

金沢 あそう？ じゃあなにぶんよろしく。高橋くん、外の様子見てこよう。

高橋 はあ…。

庸子 ありがとね、ホント助かったわ。

高橋 (老人に) だいじよぶですか？

金沢 高橋くん、行くよ。

金沢、高橋退場
老人と庸子が残る

庸子 …… 帰ってくるなら帰ってくるって言うてくださいいよ。

老人 ホントに庸子か… 大きくなったなあ…

庸子 三年前に会いましたよ。叔父さんがメキシコへ行く前。病院に会いにきたでしょ。

老人 …… おお。

庸子 どうしたんです？ どこが悪いんですか？

老人 いや… なに… あまりこの家が懐かしいんでちと興奮した…。それに…

庸子 それに？

老人 …… 弔問客の中にな…

庸子 なに？

老人 …… いや… なんでもないわい… 思い過ごし… 思い過ごしじゃ…

庸子 ……

老人 …… それにしても、わしだけのようじゃな、連城から来とるのは。

庸子 もともと連城の家から誰か来るとは思ってません。叔父さんぐらいのもの。

老人 わしや勘当の身じゃからのう。

庸子 いい年してなにが勘当ですか。

老人 勘当同然。いまだに家の金を使って遊びまわつとる風癪老人よ。… 思えばわしが連城の家を継がなんだことが、お前の人生も変えたわけじゃなあ。

庸子 なにを言い出すかと思えば…。継ぐの継がないのって、医者^は世襲^じじゃないんですよ。

老人 この頃はそうなのか。

庸子 この頃もあの頃もそうなんです。

老人 ……

庸子 なんです？

庸子 …… (笑つ)

老人 わしが逃げ切ったおかげで姉さんが… おまえの母さんが苦勞した。

庸子 …… (笑つ)

老人 …… 古い話ね。

庸子 前途有望を絵に描いたような、野心に溢れた医学生…。姉さんが見初めた男はまさにそれじゃった。わしや自分の肩にのしかかっていたぶねっしや、あがあつといつ間に消滅するのを文字通り肌で感じたよ。… 死んだのか… あの若田さんが…。

庸子 ええ。
 老人 殺しても死なんような人だったが…。
 庸子 そうね。でも、もう年だったから…。
 老人 懐かしい…本当に…この部屋で岩田さんとわしは初めて会ったんじゃ…

照明かわる。
 昭和三十八年夏。岩田診療所
 別の場所の中沢一恵。

岩田 (電話器を持ち) いや、ですからですね。そういうことは私に言われても困ってしまうわけですね。

中沢 (電話に) なに言ってるの。もともとあなたが原因でこうなってるわけじゃないの。無責任なこと言わないでもらいたいわね。

岩田 …いや、無責任と言われても困るんですね。あの…澄江さん、そこにいるんですかね？

中沢 いたらどうだっていうのよ。そんなことは今関係ないですよ。

岩田 いや、関係ないってどうか…澄江さんに替わってもらえませんかね。

中沢 なによそれ、それはつまり、あたしじゃ話にならないって言いたいわけ？

岩田 いやいや、そんなことは…あの、澄江さんですね…

中沢 澄江さんになによ。

岩田 澄江さんに替わりましょう。

中沢 …。

岩田 澄江さんに、ぜひ。…澄江さん！

中沢 うるさいわね！ 電話口で怒鳴らないでちょうだい。

岩田 あの、どうか澄江さんに。

中沢 …。

岩田 澄江さんに、ぜひ。

中沢 替わってどうするのよ。

岩田 私が話をしてみますから。

中沢 話ってなによ。なに話すのよ。

岩田 ですから、馬鹿なことはやめて速やかに家に帰るようにと…

中沢 なにが馬鹿なことよ。だいたい家に帰れないからこんなことになってるわけでしょうが。

岩田 いやあ…

中沢 かと言ってあなたのところに行ってもあなたに迷惑がかかるから、それで彼女行き場所なくしちゃってるんじゃないか。えっ、そうでしょ。違うっ？

岩田 あの…

中沢 なによ。

岩田 澄江さん、元気なんじゃないか？

中沢 元気なわけじゃないよ。

岩田 はあ…。澄江さんはちゃんとなんか食べてますかね？

中沢 そんなことどうでもいいですよ、今は。

岩田 はあ…じゃあ、あの、今は何が問題なんですかね？

中沢 だからさつきから言ってるでしょう。あのね、岩田さん。澄江さんはあなたと連城家のあいだで板ばさみになって身動きとれなくなっちゃってるわけ。自分がいなくなればこの馬鹿げた騒ぎにケリがつくんじゃないかって、そこまで思いつめちゃってるわけ。

岩田 いなくなればって…澄江さん、そこにいるんでしょ？

中沢 うっさいな澄江さん澄江さんって馬鹿のひとつ覚えみたいだ…。それでもとにかくあなたにだけは、自分が無事でいるってことを知らせておいてほしいって、そういう電話なわけ、これは。わかります？

岩田 はあ…じゃあ僕としては…どうすればいいんですかね。

中沢 あたしに聞かれたって困っちゃうわよ、そんなことは。自分で考えなさいよ。岩田 ……。

中沢 そういうわけで、連城澄江はちゃんと生きてますから。その点心配なく。

岩田 …あの、だいたいあなたは誰なんですかね？

中沢 ……それじゃ。

岩田 澄江さんにちゃんとなにか食べるようにと伝えてもらえますか。あの…もしもし…もしもし。(切れている)…。

高木、岩田のそばに来て電話を聞いている。

岩田 逆探知。(即座に電話線をたどる高木)うるさいバカ。(即座にはたく)

高木 ……なにもいっとらんがな。

岩田 冗談やつてる場合じゃないんだよ。

高木 お前が振ったんだろ。

岩田 ……やれやれ…。やっかいだな、女って…。

高木 それで？ 向こつの家はどうなってんだ？

岩田 わからん。音信不通だからな。

高木 おまえ、恩師なんじゃないのか？

岩田 まあ、そうだが…。

高木 反逆罪につき破門ってわけか。

岩田 そういったもんだ。

高木 警察に届けるよ。それが一番まともな方法だ。

岩田 ……。

高木 警察沙汰にしたくないか。

岩田 ……できればな。

高木 おまえ、よっぽどその娘が大事なんだなあ。ことを荒立てずに穏便に済ませたい？

岩田 ……ああ。

高木 騒ぎを大きくして彼女を傷つけない？

岩田 そうだよ。

高木 それで俺を呼んだわけね。

岩田 違うよ。

高木 じゃなんだよ。俺は探偵だぞ。それ以外になんの用があるんだよ。

岩田 ……定期検診だ。

高木 バカ言ってるんじゃないよ！ だいたいお前は俺の主治医でもなんでもねえだろが。

岩田 少なくとも俺はそのつもりでいる。

高木 勝手なこと言うな。…本音言えよ、おまえ。ええ？ 大事なフィアンセを見つけてくださいって。

岩田 大事なフィアンセを見つけてください。（聞き取れない）

高木 …。

岩田 うるさいな！

高木 なにも言ってるねえよ。

岩田 主治医の立場としてはお前に無理をさせられないんだよ。

高木 人を病弱みたいにいうな。じゃあ娘はどうすんだよ。

岩田 無理をしない程度に探してくれ。

高木 本気かお前は。

岩田 俺はいつでも本気だ。

高木 まあいいけどな…。けどな岩田、俺の出番はないかもしれないぜ。

岩田 なにがだ。

高木 彼女の実家さ。娘がいなくなっで一週間だろ？ 普通、警察に届けないか？

岩田 どうかな…

連城昇一（当時）登場

昇一 届けてませんよ。

岩田、高木が振り返る。

昇一 どっちが岩田さん？

岩田 私ですが…

昇一 あっはあ、あなたですか。僕のお兄さんになってくれようっていう世にも奇特な御仁は。

昇一、ジロジロと岩田を眺め回す。

昇一 警察なんかもつてのほかなんですな、あの人たちにとっちゃ。なんせ名門ですから。それにね、書置きがあるんですよ。姉の直筆。

岩田 あなたは澄江さんの…

昇一 弟の昇一です。はじめまして。どうぞよろしく。

岩田 岩田です。これは私の患者で…

高木 （咳払い）

岩田 私の友人で高木といいます。

高木 どうも。…外そうか？

岩田 いや、かまわん。昇一さん、その書置きっていうのはどういふ…

昇一 ああまあなんだかよくわかりませんがね。女性の考えることは。おおかた家とあなたとの板ばさみで面倒になったんでしようよ。しばらく頭を冷やしたいからとかなんとか。（笑つ）探さないでくださいとかなんとか。（なにがおかしいのか笑っている）まあ、実に、陳腐っていうか…（笑つ）

岩田 連城先生はなんと？

昇一 あ、あの男はそんなことでビクともしやしませんよ。愛弟子だったあなただ、よく知ってるでしょう。放っておけの一言ですよ。しかし、ま…(やつと笑いをおさめ、しかしまたニヤつきながら)母親がことのほか心配してましてね今回は。それで僕が子供の使いを仰せつかったってわけです。オヤジに内緒で、ここに澄江が逃げ込んでいないか、確かめてきておくれ、ってね。

岩田 澄江さんは一週間前からここにはきていません。(パチンと指を鳴らす)でしょうね。姉貴もそれほどバカじゃない、と。はい終了。これで僕の出番は終わり。お邪魔しました。ハケます。(スタスタと去りかける)

高木 今回は、っていうのはどういうことですか？

昇一 はい？…なんとおっしゃいました？

高木 母親がことのほか心配している、今回は、あなたのセリフです。なぜ今回は特別なんです？

昇一、はじめて高木をジロジロと見る

昇一 それがあなたに何の関係が？ ええと…

高木 高木です。(名刺を出す)

昇一 (名刺をつまみ、目を細めて読む) 探偵…

高木 連城澄江さんを探す依頼を受けています。その岩田先生から…

岩田、自分も名刺を探して体を探っている。

高木 なにやっつてんだおまえ…

昇一 私立探偵ですかあ。へえ、こりやまた面白そつなご職業で…

高木 いつもお父さんのいいなりのお母さんがそこまで心配するのはどうしてですか？

昇一 …へえ…さすが鋭いですねえ…目のつけどころがいい。

高木 …。

昇一 脅迫状の件があるからですよ。

岩田 脅迫状？

昇一 オヤジあての…ってより連城家宛てのね。ここ二ヶ月くらいかなあ。毎日のように舞い込んできてました。

高木 内容は？

昇一 いやあ、特にどうというともない、そのへんでよく見かける脅迫状です。医者に恨みがあるとか、今に天罰が下るとか、そんな陳腐な…(なにがおかしいのかまた笑っている)姉貴の件とはなんの関係もありやしません。

高木 でもお母さんはそう思っていない。

昇一 ええ、そういつわけですね。なにせ姉貴がいなくなった次の日から、ピタリと来なくなっちまつたんですから。

昇一、自分のセリフの効果を確かめるように黙っている

高木 その脅迫状と、それから澄江さんが置いていった書置き、見せてもらえませんかね。

昇一 そりゃ結構ですが…

高木 それと出来れば澄江さんが卒業した学校の卒業アルバムの類も。

高木 …… すごいなあ、条件があります。

高木 ……

昇一 私も探偵つてやつがしてみたいな。あなたと一緒に。

高木 ……

昇一 なにせ退屈なもんですね。あなたの仕事振りを見学させてくれるという条件で、僕が家から持ち出しますよ。どうです。

高木 …… (頷く)

昇一 それじゃ、(名刺をかざして)二三日中に連絡します。

昇一、退場。

岩田 …… おい、いいのか。

高木 あのイカレポンチとコンビかよ…まあ、しょうがねえだろ。

岩田 ていうか、お前、引き受けるんだな。

高木 なにをいませら。

岩田 心配だな。

高木 俺はプロだぞ。任せとけて。

岩田 お前の体のことを言っているんだ。

高木 お前は引き受けて欲しいのか欲しくないのかどっちなんだ！

岩田 顔色悪いしな。(高木の額に手を当てる)

高木 ちよつと熱っぽいんだ、それだけだよ。

岩田 風邪か。

高木 ああ。

岩田 風邪をひくなとあれほど言ってるだろうが！

高木 おまえ、それが医者の子リフか！？

岩田 とにかく気をつけてくれ。あまり外に出歩かないように…

高木 ……

岩田 つてわけにもいかないな…

高木 そうやってずっと悩んでる。じゃあな。

岩田 気をつけるよ！

高木退場。

岩田見送つて、退場。

明かりがかわる中、岩田と庸子が入れ替わるように登退場

遠くで救急車のサイレンが鳴っている

庸子は喪服のまま、後段に座る

物思いにふけっている庸子にポケベルの呼び出し音

庸子 …… (ポケベルを見て顔を顰める)

金沢、高橋登場。

それぞれポケベルを手をしている

金沢 鳴った？

庸子 ええ。

金沢 ほら、やっぱ全員召喚だ。

庸子 飛び込みの救急患者でしょ。さっきサイレン鳴ってたから。

高橋 なにも庸子先生まで呼ばなくても。

庸子 しょうがないわよ。着替えてくるから、先に行つてよ。

金沢 うん。じゃあ。

高橋 そっか。喪服じゃヤバイよな…。

金沢 高橋くん行くよ。

暗転。

どことも知れぬ暗い場所
庸子がいる

現代の服を着ている

離れたところからそれを見ている、古代風の不思議な服を着た男女がいる
庸子、顔を上げる（意識が戻った）

異世界の女がそれを見て、男に注意を促す

異世界の女1 ほら。

異世界の男2 お。

異世界の女1 気がついたね。

異世界の男2 まあ気がつかなきゃ話進まないから。

庸子 …（気づく）誰？

異世界の女1（酒井） あはあ。

異世界の男2（涼原） そうきたか。

庸子 あなた達は誰？

異世界1 挨拶したら？

異世界2 ういーす。

異世界1 …。

異世界2 なに？ その目。

異世界1 別に。

庸子 …。

異世界1 ああ、もういいって。

異世界2 いいっていいって。

異世界1 お決まりなんだよね。あなたは誰。ここはどこ。そして私は誰。

異世界2 お決まりなんですよ。

異世界1 それだけ繰り返してればドラマになるからね、だいたい。

異世界2 ラディカルだ。

異世界1 そういうルールはとりあえずどうでもいいことにしましょ。疲れるから。

庸子 なにを言ってるのかわからない。

異世界1 わからなきゃいけない理由でもある？

庸子 これって…夢かしら。そうよね…。疲れてるのよね、あたし。

異世界2 順調にお決まりのコースをたどっておりますね。

異世界1 夢ならさつきまで見てたでしょ？

庸子 え？…ええ、そうね…見てたわ…お父さんの夢…。きっと叔父さんのせい…柄にもなく昔を懐かしがったりしてたから…。お父さんがまだうんと若くて、あたしがまだ生まれる前の…夢……………そうか……………あの人死んじゃったんだ……………

異世界1 医者も死んじゃうんだね。

庸子 …え？

異世界2 そう思ったことがあっただろ、昔。

異世界1 子供の頃、母親の実家と父親の診療所をいったり来たりしながらあなたは育った。権威主義の実家、庶民派の父親、行く先々でそれぞれの空気を吸いながら成長してきた。似て非なるふたつの世界の間で引き裂かれ、育まれ、あなたはそういう混乱のなかで育った。

異世界2 祖父は言った。医は力である。力はそれを行使するものの精神に峻厳さを要求する。

異世界1 父親は言った。医は生である。それはただ単にひとつの生き方、この世と関わろうとする意思の表現に過ぎない。

異世界2 そしてあるときあんたは思った。神のように思っていた祖父も、王のように畏怖していた祖父も、すべからず医者という種に属する人々でさえ、永遠に生きることはかなわぬ。いずれ^{ひと}死すべき存在である。

異世界1 その夜、小さな女の子はひとり寝床のなかで、泣いた…。

庸子 …あなたたちは

異世界2 そんなあんたが今じゃ立派な医者だ。

異世界1 あんなに医者を嫌っていたのに。どうして？

庸子 …あなたたちは誰。

異世界1 どうでもいいことだよ。

異世界2 俺たちが誰でも。あんたにはまだ関係ない。

庸子 …まだ…

異世界1 そう…今はまだ。

異世界2 ひょっとしたらこの先もずっと。

異世界1 でもまあ、せつかくこうやって袖摺り合ったんだ。名前くらい名乗っておくか。

立ち上がる。

異世界1 あたしの名はセフル。

異世界2 俺はカラパン。

異世界1 (セフル) あたしたちはふたりともアシャを守るためにここにいる。

異世界2 (カラパン) アシャを守るためにドウルグワントを見張っている。

庸子 セフル…カラパン…

セフル もしまた会ったらあんたの答えを聞かせてもらおうよ。

庸子 答えて…？ なにを答えればいいの？

カラパン 聞いてるよ、人の話を。

セフル あんなに医者を嫌っていたあんたが、なぜ医者になったか、さ。

庸子 …あ、待って…

現実と幻想が交錯する奇妙な明かりの中で、
緩やかに二人の幻たち(セフル・カラパン)と現し身たちが緩やかに入れ替わる。
現し身の人々は本を携えている。(一村/小倉/阿部/高橋)

司書(京子) あの…もし？

庸子 …。

司書 もしもし？

庸子 あたし…あら、ごめんなさい…

司書 そろそろ閉館になりますから。

庸子 寝ちゃったのね…。やだな、みっともない…。ごめんごめん。

司書はただにっこり笑う。

庸子は司書の笑顔にちょっと見とれるが、気をとりなおして

庸子 ごめんね。そっか…図書館だったんだ。
 司書 ええ。
 庸子 あたし最後の一人？ ごめんね。
 司書 いいえ…まだ……
 庸子 どうかした？

司書 ふとある場所を見ている。

庸子 ちよつと、あなた？

司書 ええ、最後です。さつきまであそこに…ふたりいたような気がしたんですけど。

庸子 (振り返る) 誰もいないわね。

司書 ええ、いませんね。

庸子 …じゃああたしも。そんじゃね。

司書 さようなら。

庸子、荷物をまとめる。

司書、その様子を見るときもなし見ている。

司書 お医者さんなんですか？

庸子 …どうして？

司書 いつも医学書の棚に…

庸子 ああそうよね。ええ、そう。うちの病院あんまり本なくて。ここけっこう揃ってるから。

庸子、去ろうとする。

司書、さつき見ていたほつをぼんやり見ている。

庸子 ねえ、あなたアルバイトなの？

司書 …(黙って庸子を見る)

庸子 それとも職員？

司書 (質問の意味がわかって) 職員です。いちおう、司書ですから。

庸子 あらっ、司書なんだ。若いのに凄じじゃない？ 司書ってなかなか就職厳しいって聞いたけど…

司書 ええ、欠員補充でもないし、ほとんど新規には…。

庸子 そうなんだ。…仕事面白い？

司書は黙って頷く。

庸子は相手の年齢不相応の落ち着き振りになんとなく落ち着かなさを覚えている。

庸子 好きでやってるんだもんね、あたり前よね。

司書 ええ。

庸子、手を振って退場する。

司書、会釈する。

司書はその後も、ある場所を見ている。

司書退場。

金沢医師登場。病院の休憩室。座る

金沢 どうですか具合は？ え？ 悪い？ 薬が効かない。あそつ。おかしいね。じゃあちよつと見ましょつか。はい、じゃあ胸出して。え？ いやだ？ 胸出さなきゃ診察できないでしょ。え？ なに言ってるの。え？…せくはら？…（キラリと光る目で考え込む）あのね、おばあちゃん。滅多なこと言わないでくださいよ。最近それでなくても医者に風当たり強いんだからね…。だいたい僕がなんでセクハラ…：…え？…なんで知ってるの！…：…指輪？ 去年はしてた？…：…いや、そんなことはね…。え、看護婦に聞いた？ 嘘言いなさいよ。誰にも言っていない…：…てことはないか…：…みんな知ってるか…：…え？ 女房に逃げられて溜まっているんだろつ？…：…いやいやちよつと待ってくださいよ。まったく…：…ハハハ…：…まいっちゃんなあ…：…ハハハ…：…（笑いながら、どこやらからモデルガンを取り出し、患者に向けて）余計なお世話だババア！ おとなしく聞いてりゃつけあがりやがつて！ 手上げる！ おとなしく服脱いでとつと診察させや…：…あ。

大槻 なにやつてんです、金沢先生。

金沢 いやあ…：…ちよつと予行演習。

大槻 なんの。

金沢 ていうかちよつとしたつて息抜きつていうかストレス解消つていうか…：…。

大槻 溜まつてるんじゃないんですか離婚なさつてから。

金沢 余計なお世話です。

大槻 そんなオモチャ病院に持つてこないでくださいよ。

金沢 オモチャじゃないよ。MIGコンバットマグナム、ヘビーウエイトマシンモデル。

大槻 なかなか手に入らないんだよこれ。

金沢 いい年したドクターがモデルガンごつ…：…。

大槻 ごつこつて言うな。

金沢 モデルガンフェチ。

金沢 フェチつて言うな！

高橋医師登場。

高橋 ういつす。

金沢 おはよ。

大槻 あつ。

高橋 ぎく。

大槻 高橋先生。あれほど流動食食べないでくださいつて言ったでしよう！

高橋 なんてバレたのかな。

大槻 空き缶捨ててあつたからです。数が合わないつて言つてまた婦長から怒られるのは私なんですから。

高橋 腹が減るとつい…：…ね。栄養あるし…：…。すぐそばにあるし。パカつ、グイつ…：…と、

大槻 やめてください。

高橋 はい。

連城医師登場。

庸子 おはつ。

金沢 あつ。

高橋 すつ。

大槻 連城先生、言ってやってくださいよこの人に。
庸子 おー朝からテンション高いね大槻さん。

高橋 いやあ、慣れると意外とうまいし…。

大槻 ちゃっ！ まだ言うか。

庸子 なに？（金沢に）

金沢 高橋さん流動食の缶パック食ってんだって。

庸子 あ、あたしもよく食ってた。

高橋 ホラ。

大槻 なにがホラですか。

高橋 名医は流動食が好き。

大槻 誰が名医ですか。

高橋 …。（自分を指差す）

大槻 …。

高橋 …（指が庸子のほつに）

大槻のポケベルが鳴る。

大槻 鬱陶しいなまったく…

何か言いかけた大槻、ため息をつけて退場。

金沢 なに、茄子（看護婦の意）までポケベル持つようになったの？

高橋 点滴終了コールですよ。先週から導入だって。

金沢 へえ。世知辛い世の中だねえ。

高橋 しかし…庸子先生も流動食ファンだったとは…感激だなあ。

庸子 今は食べてないわよ。レジデント（研修医の意）の時。あんまり忙しくてもの食う

ヒマもなかったからね。オーベン（指導医師の意）が「流動食でも食ってろ」って。

金沢 （笑って）そりゃ厳しい。今度俺もアホなレジデント来たら言おう。

高橋 はあ…。庸子先生の青春時代っすね。

庸子 そうねえ…若かったっすねえ。

金沢 まだ若いでしょうが。

高橋 ええ？…いや、うん…

庸子 あの頃は、エイズの治療法を発見してフレディ・マーキュリーを救ったって
思ってたわあ。

金沢 あ、庸子先生クイーン好き？ そつか、ちょうど十年前だね、死んだの。

庸子 （悲しげに首を振り振り）フレディが死んだときあたしの青春は終わったの。

高橋 …フレディてなに？

金沢 知らないか？ こうんな爪した…

高橋 絶対違うでしょ。

比較的のほほんとしたチャイム（サイレン？）が鳴り、赤いランプが点滅する。

大槻、再登場。

大槻 連城先生。不明七番サン。

庸子 だあ…

庸子、物凄く素早く退場。

高橋 七番ていうと…

金沢 ほら、庸子先生の葬式の日(コイマ)に担ぎ込まれたやつ、昏睡(マ)の。

高橋 ああ、アレまだ身元わからないんだ。

大槻 ほら、先生達も。

高橋 なんて俺たちまで…

大槻 CPR(心肺蘇生処置の意)です。

大槻、言い捨てて退場。

高橋 やれやれ。心停止だよ！ 全員集合。…か。

金沢 高橋くん、行くよ。

高橋、金沢退場。
暗転。

高木の部屋、早朝
管理人江間勝子小さな手鍋持って登場

勝子 たかーぎさん。

高木 ……(起きない)

勝子 入るよ。入っちゃうよー。

勝子、薄暗い部屋に入ってくる。

勝子 なになにないに、どしたの？ 具合でも悪い？

高木 んん…

勝子 もう朝ですよ高木さん。世間はね、朝。あーさー。

高木 やかましいな…。

勝子 お、起きた。

高木 起こされたんだよ。どこから入ったんだ、まったく…

勝子 ドアからに決まっていますでしょ。高木さん全然力ギ閉めないんだから。ま、盗まれるようなモンはないか？

高木 朝の静かなひと時。

勝子 この部屋薄暗いよ。ブラインド開けましょうね。

高木 聞いてないね、人の話。

勝子 はい、ワイドオープン。…あ、逆だ。いつも逆なんだな…。

紐をひっぱる仕草をすると明るくなる。

勝子 おー！ 明るい！ いい天気だよ高木しゃーん！

高木 あそつ。

勝子 一回閉じてみよう。

閉じる。暗くなる。

勝子 うん。……………素早く開けてみよう！

といつつ素早く紐をひく。素早く明るくなる。

勝子 これは面白いかも…。ゆっくり閉ーじてみよう…

といつつゆっくり紐をたぐる。ゆっくり明るくなる。

勝子 と見せかけて素早くあけ！ (素早く明るくなる) ようとしたら逆だった！ (ス

ゴスゴと暗くなる)

高木 なにやっつてんだあんたは。

勝子 どうもご苦労さまです。開けときます。

高木 誰にしゃべってんだ。

勝子 あのね高木さん。あたしね、柳川鍋作っただけだよ。

高木 朝っぱらからかい。
勝子 見る？

高木 見るだけかい！

勝子 (鍋の蓋を持ってちらり) 見えた？

高木 なにしにきたんだあんたは。

勝子 もう退屈で退屈で。高木さんさ、仕事入ったんでしょ？

高木 なんてわかるんだよ。

勝子 わかるのよ、管理人のね、勘なのよ。

高木 あっそう。で、仕事が入ったらどうだっというの。

勝子 どのなのどんなの？ 面白そうなジケン？

高木 ただの人探し。

勝子 どんな人どんな人。男？ 女？

高木 女。

勝子 わあ〜おう。

高木 なにが。

勝子 やっぱりさ、なんかこつ暗い秘密なんかあったりするでしょ。出生の秘密とかさ、マイクフィルム持ってたり、同じ形の痣があったりするでしょ。

高木 なに言ってるんだかさっぱりわからん。

勝子 いいなあああ〜刺激があつて。

高木 だからなにしに来たんだよ君は！

勝子 あのね、お客さん来てるよ。

問髪いれずに昇一登場。

昇一 どうも、高木さん。

高木 最初に言えよ！

勝子 ちようどドアのところまで待ってたみたいだから。

昇一 このままドアの外で朽ち果ててしまうんじゃないかと思いました。

勝子 高木さんの頭が回転するまで時間がかかるんじゃないかと思ってさ。

高木 お気遣いどうも。

昇一 さっそく持って来ましたよ。例のもの。

高木 わざわざどうも。

昇一 捨ててしまったものもありますが、だいたいは残ってます。

高木に封筒を渡す。
興味津々で覗き込んでいる勝子。

高木 …。(勝子を見る)

勝子 …。(視線に気づく)

高木 ちよつとマナーがなってないんじゃないの？

勝子 そうか、そうよね。(昇一に向かって) どうもご挨拶遅れまして、アパートの管

理人の江間勝子と申します。江戸の江、間借りの間…

高木 おい。おい！ 違う！… 席外してくれって言ってるの！

勝子 そんな殺生な。

高木 いいから。ほら、帰って。ほら、早く！

高木、勝子をドアから押し出す。

勝子 あ、ちょっと、なにを、あ、ご無体な…あ〜れ〜
 とかなんとか言いつつ勝子退場。

高木 ……(ため息)

昇一 脅迫状のほうは全部同じ人間が書いてるようですね。字が同じだ。あとそれが姉
 の出た短大の卒業アルバムです。

高木、手紙類に目を走らせる。

昇一 ……ここ、何置です？

高木 ……(手紙を読んでいて答えない)

昇一 (部屋を見渡して) 十二畳…いや、もうちょっとあるかな？

高木 ……

昇一 日当たりも悪くない。いやあ、意外だなあ。

高木 なにがいたいのか？

昇一 探偵つて儲かるんですか？ 意外といい部屋に住んでるじゃないですか。

高木 儲からないよ。これ、預かっていいかな？

昇一 (興味なさげにどうぞと手を振る)

高木 どうも。

昇一 で？

高木 で？

昇一 どうするんです、これから。

高木 あんたの姉さんを探すんだよ。

昇一 なにかからはじめるんです？

高木 (卒業アルバムを掲げて) コレからだ。

高木、上着を着る。具合悪そうな様子である。

高木 来るのか、来ないのか？

高木、退場。

昇一 ……(肩を竦めてついていく) 鍵閉めないんですか？ (消えつつ)

高木 いいから早くしろよ。(声だけ)

ふたり退場。

明かりが変化し、異世界へと移行する。

異世界3(スバコ)、すつつと出る。

異世界4(アシャワン)が後に続く。

反対側からカラパン、セフル出る。

立ったままじつと目を閉じて念を凝らしている様子のスバコ。
 他の三人はそれぞれ、それを見守り待っている様子。

カラパン ……どうなんだ。

セフル ……しいつ。

カラパン まだ見えないのか。

セフル 静かにしてなよ。あんたが騒ぎ立てたってなんの役にも立ちゃしないんだ。

カラパン やつが近づいてる…俺にはやつの足音が聞こえるんだ。それなのに俺達には
 やつの顔がわからない。顔がわからなきゃどうやってやつを倒す？ どうやって
 やつを見分けるんだ？

セフル だから今それを探ってるんだろ、おとなしく待ってるよ。

アシャワン 焦るな…待つんだ。
 カラパン …。

スバコ、息を吸い込む。閉じた目で上方を見上げる。口が開く。
 見守る三人。

スバコ …ふああ…(と欠伸をする)

カラパン …。

スバコ ん…(三人の方を見る)

三人 …。

カラパン 死にたいのか貴様。

セフル 真面目にやってんの？

スバコ 駄目だね。なにも見えない。

カラパン 駄目ダネじゃないよ、駄目ダネですませるなよ。

スバコ 見えないものは見えない。

カラパン それでもお前は俺達の「目」なのか、ええ！

スバコ 人のことは放っておけよ「耳」くん。

セフル どうする？ アシャワン。

アシャワン 仕方ないだろ。スバコの目が澄んで敵の顔がはっきりするまでは、誰にた
 いしても油断しないことだな。

セフル 待つしかないか。

アシャワン スバコ。本当になにも見えないか？

スバコ ああ…闇だ。

アシャワン 闇…？

スバコ ドウルグワントが来る。カラパンの言うとおり、近づいてきている。まだ顔は
 見えない。ただ大きな闇の塊…。人の形をした暗黒…。それがやつだ。

カラパン どんな形だ…どんなやつなんだ！

スバコ わからない…ただ…

カラパン ただ？

スバコ …いや…なんでもない…まだ駄目だ…もう少し近づけば…

カラパン …。

アシャワン …行こう。

カラパン、セフル、退場
 続いてスバコ。
 その背中にアシャワンが声をかける。

アシャワン スバコ。

スバコ …。

アシャワン なにを言いかけた？

スバコ …女だ…女の姿がチャリとだけ、見えた…

アシャワン 女？

スバコ
…。

スバコ、それ以上何も言わず、背を向け退場。
アシャワン、続いて退場。

明かりが変化し、異世界人は退場してゆく。
現在。病院。早朝

大槻登場、ぐったりと椅子に座る
金沢登場

金沢 あれ、また早いね今日も。

大槻 あがります。お先に。

金沢 あそ。おつかれー。

高橋、流動食の缶を持って登場

高橋 ルルル…おっと(缶隠す)

金沢 はよ。

大槻 なに隠したの今…？

高橋 なんでもないよ。

大槻 あそつ、…どうでもいいや…

金沢 大槻さん、弱まってるネー！

大槻 …三連続中死に。(中死に)とは、深夜勤明けの深夜入りのこと。たいてい昼間は寝て終わる)

高橋 ご愁傷様。

金沢 (笑って)深夜の女王だな。

庸子、登場。なにやら書籍が書類を見ている。くわえタバコ

金沢 う。

庸子 ん。

大槻 連城先生、ここ禁煙…

庸子 わかってるわよ、火つけてないでしょ。

大槻 なら通し…

高橋 弱まってるのにチェックだけは早いね。

金沢 口唇性欲を満足させているだけか。

高橋 なるほど。庸子先生まだ口唇期ですか。僕なんかもう肛門期ですよ。

庸子 プシコの医者みたいなこと言ってんじゃないわよ。(プシコとは精神科。口唇期、

肛門期はフロイド学説)

大槻 肛門って言えば、金沢先生、渡邊のおじいちゃん、いつまで個室に入れとくんですか。

金沢 渡邊さん？ なんか問題あった？

大槻 排便の時あの肛門で指締めつけてくるんですよ。

金沢 (ただ笑う)

大槻 笑い事じゃないですよ。万力のような括約筋なんですよ！ 抜けなくなるんですよ！ そりゃあ寝たきりだからウンコほじくるのだったってこっちは仕事だからやりますけどね。 にもケツ締めなくなっただっていいでしょ！ ケツ締めなくなっただって！

隠れて流動食グイ飲みしていた高橋危うく噴出しそうになる

金沢 ちよつとちよつとあんまりえぐい話はよそうよ。

高橋 そうだよ。

金沢 まあ、わかるけどさ。

高橋 俺なんかこう見えても育ちがいいんだから。

大槻 へえ。そりゃあお見逸れみそしましたネ。

高橋 ウンコ食つてるときにカレーの話をするんじゃないってオヤジに殴られたもんだ。

大槻 スカトロ親父かい！

金沢 庸子先生、さつきからなに難しい顔してんの？

庸子 ン…。七番。

金沢 ああ。あれね。

高橋 七番って、あれまだ身元不明なの。

庸子 (頷く)

金沢 警察もさ、不審死だったらちゃんと調べるんだらうけど、なにせまだステってないから。(ステるとは「死ぬ」の意)

高橋 脳死判定したんですよね。

庸子 (うん)

高橋 結果は？

庸子 (ただ首を横に振る)

金沢 深昏睡。瞳孔散大。自発呼吸も止まってる。レスピレータ外して確かめた。脳幹反射もまったくない。

高橋 じゃあ…

庸子 脳波よ。(バサツと持っていた書類を下げてはじめて顔を上げる)…脳波だけが残ってるの。ずっと。

金沢 珍しいケースだよな。普通脳波なんて真っ先にフラットになっちゃうだろ。薬飲んだだけでも平らになっちゃうよね。

大槻 そもそも原因はなんなんですか？

庸子 …。薬飲んでたってことはなかったのよね？ 血液検査では。

高橋 ええ。それは間違いないです。

庸子 ただ全身の機能が衰弱してる…状態として一番近いのは………老衰ね。

大槻 老衰って、あのヒトどうみてもまだ三十代ぐらいじゃないですか。

金沢 わからないって言うてるのと同じだね。

庸子 …。

高橋 あのう、ワタシ勉強不足でよく知らないんですけど、脳波残存ってことは、大脳皮質が生きてるってことですか？

金沢 そうね。

高橋 脳幹反射なしで脳幹部が死んでるとして、大脳皮質だけが生きてるって場合、意識ってあるんですかね？

金沢 意識があるか？ そんなことわかんないよ。わかりようがないだろ。とにかくいえることは、現行の判定基準じゃ脳死にはできないってことだけさ。

大槻 助かる見込みってあるんですか？

金沢 脳幹死んでるんだぜ？ 可能性ないだろさ。普通の脳死患者と同じ、レスピレータでいけるとこまでいって自然に終わりだよ。それは間違いないね。

高橋 ふーん。

金沢 早くレスピレータ空けないと救急患者逃がして儲かなくなるって、院長のハゲがうるさいしね。

大槻 うわあ、身も蓋もない。

庸子 そうね…それは間違いない…。でも…

高橋 …でも？

庸子 …そうね…十中八九…九十九%…まもなく心臓が止まる…脳に流れこむ血流が途絶え脳波もとまる…間違はなく…長くても数日…でも…

金沢 でも？

庸子 なぜだろう…こんなに胸がドキドキする…

金沢 …風の谷のナウシカがあんたは。

大槻 ル〜ル〜ル〜ルルル…(テーマ曲っぽいメロディ)

庸子 真面目に言ってるの！…それはドラクエ。

大槻 ル。

庸子 …金沢さん、あたし、今日早退^びするわ。

金沢 はあ？

庸子 あとよろしく。

庸子、スタスタと出て行く。

金沢 よろしくつて、おい！

庸子退場。

顔を見合わせる金沢、高橋、大槻。
暗転。

図書館。

司書京子が座って本を読んでいる。

一方で若い男が熱心にノートになにか書き込んでいる。
京子、ふと目を上げて若い男のほうを見る。

京子 熱心ね。

祥太 え？

京子 凄く熱心に書いている。

祥太 ええ…。

京子 いつもその席に座ってるのね。

祥太 (ちよつと考えて)「ここ、居心地いいから…」

京子 いちばん涼しいのよ、そこ。

祥太 ……そうかな。

京子 そう。ほら、冷房の噴出し口があそことあそこでしょう？ だからそっちの奥と窓際は直撃で、外から入ってきて座ったばかりはいいけど、じきに寒くなっちゃうの。

祥太 ええ。

京子、立ち上がって上を見上げながら

京子 ふたつの冷気があのあたりでぶつかりあって、ちよつどこのあたりにゆっくり落ちてくるの。途中である陽が差す窓のあたりで暖められた空気とまざりあいながら。入り口のドアが開けられるたびに部屋全体の空気はゆっくりこつこつという向きで流れていくから、ほどよい温度になった空気は少しずつそっちに押しやられていく。(そう言いながら空気の動きと一っしょにゆっくり歩いていく)そしてこのあたりに溜まるの…そう、ちよつどあなたの座っているあたり。(京子は祥太のすぐそばに来ている)

祥太 へえ…。見えてるみたいですね。

京子 見えるわよ。一日中眺めていれば誰にでもわかるわ。

祥太 そうかな。

京子 ええ。

祥太 じゃあ僕はこの図書館で一番いい席に座ってるんだ。

京子 そう。司書の私よりね。

京子は微笑む。

祥太はなんとなくまぶしげに京子の笑顔から目をそらす。

京子 布施祥太くん、だったっけ？

祥太 え…はい。

京子 歴史に興味があるの？

祥太 ……。

京子 あなたの借りる本。

祥太 ああ、そうですね。

京子 それもつんと古い時代が好きみたいね。ササン朝以前のペルシャの研究でもしているの？

祥太 別に研究なんて…ただ読んだけだです。なんとなく好きなんです。あの時代の人たちの名前とか、地名とか…ただの外国語じゃない感じで…

京子 …
祥太 ほら、ジャックとかポールとか、そういう外人風の聞き慣れた名前じゃない、不思議な響きがあると思うんです。違う世界みたいなの…

京子 そうね…
祥太 どうしてなのかわからないけど、すごく惹かれるんです。

京子 キリスト教の影響を受けていないから。

祥太 でもそれだったら、今のイランとかイラクとかもそうでしょう？

京子 あちらは逆にイスラム教圏の影響ね。でもあなたが読んでいる世界では、キリスト教もイスラム教もまだ生まれていない。後世に広まることになかった世界ね。

祥太 でも…
京子 ええ、そう、もちろんゾロアスター教は今でも残っているわ。三大宗教が生まれる以前、唯一世界宗教の可能性を持った宗教。いいえ、実際に、アケメネス朝ペルシャがマケドニアのアレクサンドルに負けなければ、そうなる可能性はじゅうぶんにあったの。

祥太 …。
京子 紀元前五八三年。教祖ゾロアスターが死んだと言われているのがその年。インドではまだブッダが生まれてもいない、遠い遠い昔。

祥太 ツアラトウストラ…

京子 …え？

祥太 ツアラトウストラって、ゾロアスターのことですよね…

京子 ええ、そうね。…ゾロアスターは英語風の読みだけど、現地の発音に忠実によめば…

祥太 ツアラトウストラは目覚めてすぐ…

京子 え？

祥太 ツアラトウストラは目覚めてすぐに、傍らの女に微笑みかけた。神殿の中、彼を守るものたちも、奇妙な姿の神官達も、それを見ていた…

祥太は、遠くを見るような目でじっとどこかを見ている

京子 …あなたには…見えるの？

祥太 え？

京子 あなたにも、彼らが見えるの？

祥太 彼らって…

京子 …カラパンや、セフルや、スバコ…

祥太 …

祥太は驚き、奇妙な目で京子を見ている

京子 うっん、名前を知っているのは不思議じゃないの。あなたが忘れていったメモを見たのよ。

祥太 メモって…

京子 あなたがずっと書いている物語のためのメモ。ときどきここに忘れていくでしょう？

祥太 ああ…

京子 それでなんとなく思ったの、あなたが物語を書いていて、そのために古代ペルシャの本を読み漁ってるんだなって。そうでしょ？

祥太 ええ。

京子 奇妙な服をまとった古代ペルシャ風の…でもそれともどこか違う、どこでもない場所、いつでもない時代の、異世界の話…。

祥太 どうして…

京子 どうしてわかるか？ そうね…それは私にもわからないの…でも、あなたが置き忘れていったメモを見てから…どうしてかしら…

祥太 …

京子 私にも見えるのよ。

祥太 …。

明かりが奇妙に交錯する。
現実と異世界が混ざり込む。
立ちすくんで動かない祥太と京子。
影のように素早く登場する異世界人たち。

アシャワン 確かか？

スバコ 間違いない、見えた。

アシャワン カラパンは？

セフル 一足先に。

アシャワン ドウルグワントなのか？

スバコ それはわからない。だがなにかがやってくる。女の姿をしたなにかが。

アシャワン 敵なのか。

スバコ わからない。だが異質だ。

セフル 異質？

スバコ この世のものじゃないなにか。われわれとは違うものだ。

アシャワン …。

スバコ ただわかつてるのは…

アシャワン なんだ？

スバコ そいつはなにかを探している。近づこうとしている。そして、見届けようとしている。

アシャワン …。

セフル どう思う？

アシャワン とにかく確かめよう。それからだ。

スバコ 西だ。

音もなく姿を消す異世界人たち。

京子 …なにが来るの？

祥太 わからない。

京子 書いているあなたにも？

祥太 わからないんです。物語の先のこととは。

京子 書きながら考えているのね。

祥太 ええ。

京子 さっき、ツアラトウストラのこと…

祥太 それは最初から決めてあるんです。ツアラトウストラはずっと眠っている。神殿と呼ばれるところで、神官達にかこまれて眠っている。アシャはツアラトウストラの眠りを妨げないようにする役目を負っている守護者。その守護者に付き従い、守っているアシャワン、スバコ…

京子 セフルに、カラパン…。彼らはなにから守っているの？ 敵の正体はなんなの？

祥太 ドウルグワントは、暗殺者の形をとって現れます。その正体は闇そのもの。人間でも神でもない。もしかしたら死そのもの…

京子 スバコを見た女…現れる女はドウルグワント？

祥太 わからない。まだ。

京子 そう。…でもわたし、ひよつとしたらその人を知っているかもしれない。

祥太 …え？

京子、退場。

祥太、追って退場。

明かりの変化が終わり、現実の世界。
高木、昇一、スーツ姿の若い男(田代)登場。

田代 つまりこれからの先の時代、どんどんどんどん老人が増えて、若い稼ぎ手が減っていくだろうと、そういうことなんですよ、簡単に言うと。

高木 …うん。

田代 するとどういうことになるか。我々を生み、育ててくれた親の世代、この高度成長を支え、大きいことはモーレツにいいことだと、金を稼いでる現役世代が、力尽きてバタバタと倒れていく、それを見捨てるわけにはいかない、そこで福祉や医療の社会負担がどんどんこう膨れ上がっていく。

高木 ふん。

田代 絶対に絶対に、そうなりますよ。このままだけは日本は老人大国になる。そうなるよね、これまで以上に健康ってことが重要になってくるわけです。どういう意味かって言うと、今みたいに、労働力をメンテナンスして生産性を上げるための医療じゃなく、将来的に医療負担を減らすための健康。ボケないための予防医学。極力国の医療予算を減らすための健康産業。これです。これがこれからの花形産業に成長していくんです。絶対。

高木 ほう。

田代 ね？ わかります？ だからこれが絶対確実な…成功を約束する商品というわけです。

田代、手にしていた怪しげな健康器具のような品物を振りかざす。

高木 ふーん。

田代 ね。どうです。あなたにも夢があるでしょう。これは夢を叶える道具なんです。なぜならこの商品は私のところではしか仕入れてない。専売特許です。さらに製造特許でがんじがらめにしてあるから、他のメーカーで真似される心配がない。さ

らにこの先つちよにゴムがついてるでしょ？ 見えます？ このゴムが特殊な赤外線を放射してツボを刺激するわけですが、このゴムは三週間ごとに取り替えないと効果が薄れるのです。ですからあなたのユーザーが換えのゴムを購入するたびに、あなたは七・四パーセントのマージンを手にすることができます…。

高木 あかね、ちよつと…
田代 さらにあなたのユーザーがこの商品を買えば、その孫ユーザーからのすべて七・四パーセントのマージンが…

高木 いや、あかね、田代さん…。

高木 七・四パーセントはいいんだけど、さっきから言ってますが、私そのなんとかっていう健康器具だかなんだかの説明を受けに来たわけじゃないんです。
田代 (大きく頷く) わかってます。わかってますよ。

高木 わかってます？

田代 誰にでも夢がある。

高木 わかってないと思うなあ。

田代 それを叶えたい、実現したい、でもそれには人生は短すぎる。

高木 あかね、

田代 だから若いうちに大金をつかみ、わずらわしい労働のくびきから開放され、そして夢を…！

高木 田代さん、田代さん。人生短いんで、てっとりばやくお聞きしたいんですが…。
田代 連城澄江さん、ご存知ですか？

高木 は？

高木 連城澄江さん。二十四歳。

田代 (考え込んでいるが記憶にない) いやあ…

高木 あなたのところ、定期的にやってるこの商品の説明会がありますよね。

田代 セミナーです。

高木 そのセミナーの会場で連城さんを見かけたっていう人がいましたね。

田代 はあ。

高木 …思い出せませんか？ 連城澄江。説明会で…

田代 セミナーです。

高木 セミナーね。セミナーで。

田代 いやあ、なにせ大勢を相手にするもんで…(考え込んでいる) だれがその人を見たとっというんです？

高木 同じ説明…セミナーに来ていた短大の同級生です。今じゃ付き合いもないし、声もかけなかったそうですが、非常に意外に思ったんで覚えていたそうです。

田代 意外？ なぜ？

高木 まあ、そういう場所に来るようなイメージじゃなかったんでしょう。

田代 イメージとは…？

高木 …。

昇一 医者の娘なんですよ。それもかなり名のある医学者の娘。そんな娘がインチキ健康器具のネズミ講の説明会に来てるんだから意外…

田代 セミナーです。え、え、なんですと！？ インチキ健康器具！？

高木 いや、あの田代さん…

田代 ネズミ講!? 言いましたね! 言ってしまいましたね!? それはね、それは名誉毀損ですよ! いいがかりですよ! 訴えますよ僕は!

高木 いやいや、田代さん落ち着いてください。

田代 だいたいなんなんだ、あんたたちは! 僕は夢を売る商売をしているんです。うしろめたいことはなにもない。みんなそれはそれは喜んでるんです。なんなんだあんたたちは。

高木 私は探偵です。

田代 探偵がなんだっていうんだ。

高木 その連城澄江っていう女性が行方不明になったんで、お話を聞いて回っているんですよ。

田代 そんなこと僕には関係ない。

高木 ごもつとも。なにもあなたに責任があるとは言っていないません。

田代 あたりまえだ!

高木 まあともかく、その女性のことでなにか思い出されましたら、ここに連絡してくださいますか。私がない場合、江田勝子という女性が伝言を承りますので。

田代 なにも知らないぞ、僕は!

高木 はい、わかりました。万が一、思い出された場合はといつこと。どうもお忙しいところお時間取らせました。

田代、憤然と名刺をポケットに突っ込んで、退場していく。

田代 あんた顔色悪いよ! 不健康だよ! 買ったほうがいいよ、これ!

高木 ご親切にどうも…。

田代、捨てゼリフとともに退場。

高木 …君向いてないよ。

昇一 ただのアホウじゃないですか。なんの手がかりにもなりやしない。

高木 つたく…。口閉じてろって言うてるだろ。あんたの希望どおりこうやって連れて歩いてんだから、邪魔しないでくれよ、せめて。

昇一 しかし思った以上に地味ですねえ。

高木 あんた幻想抱き過ぎだよ。

昇一 アルバムの同級生もあらかた当たった。そのうちの一人が言った健康器具セミナーってやつもこの通り空振り。で、次はどうするんです?

高木 大学病院だよ。

昇一 はあ?

高木 あんたのお父さんのいた大学。それから医局。

昇一 なんのために?

高木 あんたの姉さんを匿ってくれそうな友人関係の線は今のところ出てこない。次は脅迫状のほうだ。

昇一 関係あると思ってるんですか、脅迫状。

高木 わからんがやるだけはやる。あんたの父親に恨みを持ってそうな人物がいいるかどうか。しらみつぶしだ。

昇一 そんならまず私をつぶしてください。恨んでるっていうなら一番乗りだ。

高木 …家庭内のゴタゴタには関心ないよ。行こう。

高木、やや立ち眩む。

昇一 …… だいじょうぶですか？

高木 ……

昇一 あのネズミ講の言い草じゃないが、ひどい顔色だ。ちょっと休んだほうがいいじゃないですか？

高木 だいじょうぶだ。… 行こう。

昇一 …… 勤勉だなあ。私には向かない職業ですね、やっぱり。

高木 置いてくぞ。

高木、退場。

昇一、追って退場。

ある部屋。

若い男(慎二)登場。ここは彼の部屋である。

慎二 どうぞ。狭いところですけど。

後ろから庸子登場。

庸子 いいのかしら、上がっちゃって。

慎二 ええ。どうしてですか？

庸子 …… (口を曲げて笑ってみせる。)

慎二 (気づいて) ああ、そうっすね。片付いてますね。

庸子 あなた独身だっけ聞いてたから。

慎二 誰から？

庸子 うちのナースで大槻って…

慎二 ああ、静さん。知ってますよ。

庸子 あなた、けっこう人気あるわよ。うちのナースの間では。

慎二 (ちよっと笑って) どうですかね。まああの病院にはちよくちよく行ってますけどね。

庸子 先週の水曜日も…

慎二 先週… ああ… 行きましたね。

庸子 三十代くらいの男性で、意識不明の昏倒。それをあなたが救急でうちのセンターに運んだ。

慎二 ええ。あの… 処置になにか問題でもありましたか？

庸子 どうして？

慎二 病院の先生が後から救命隊員のところに訪ねてくるなんて… 初めてですよ。

庸子 …… そうね。ごめんなさい。別にあなたの仕事に問題があったわけじゃないの。そうじゃなくて…。ただあなたと会ってみたくなくて…。なにかせずにはいられなくなっちゃってね。

慎二 ……

庸子 わからないわね。こんな説明じゃ。

慎二 ですね。

庸子 座っていい？

慎二 ええ。

庸子、座る。慎二も座る。

庸子 … まだ身元がわからないの、あの人。倒れた原因も不明。人工呼吸器で保たせてる状態なの。

慎二 脳死ですか？

庸子 (首を横に振る) 厳密には。でもほとんどそれに近い状態ね。

慎二 ふうん。そうか…。駄目でしたか、あの人。

庸子 ええ、たぶん無理ね。脳波が残ってるけど、それが消えて六時間経てば脳死ってことになるわ。

慎二 やっぱりなあ…。

庸子 … やっぱりって…？ どういうこと？

慎二 いや…こんなこというと不謹慎ですけどね…。なんとなく感じることもあるんですよ。救急車で飛んでって、人乗せて、応急処置しながら病院に運ぶ…。それが

俺達の仕事ですけど、その人の体をこう、持ち上げた瞬間にね…ああ、これは助からない、とかね。何百人もそうやって運んでると、なんとなくなんか感じるようになるんです。もちろんそんなことでやることが変わるわけじゃないけど。

庸子 …。ねえ、その時の話、聞かせてくれる？ なんでも、感じたことでも、見たことでも…。

慎二、思い出すようにしばらく黙っているが、静かに口を開く

慎二 あの人運んだとき、まだ脈も呼吸もあつたけど…なんていうか…、これは自然に終わってるんだって…そう思いましたね。

庸子 自然に…？

慎二 寿命っていうのかな…。変ですよね、あの人まだ若いのに。でもなんとなく、病気とか怪我とかじゃなくて、これで自然に終わってるんだって、そんな感じがしたんですよ。

庸子 …。

慎二 身元不明ってことは、仮に脳死になっても移植には回せないですね。

庸子 ええ、そうね。ドナーカードどころか、なにも身分を証明するようなものを持ってなかつたみたいだから。脳波が消えて正式に…っていうのもおかしいけど、脳死になったら、自然に心停止するまで待つだけ…。

慎二 それって珍しい症状なんですか？ 脳波だけ残ってるっていうのは？

庸子 そうね、あんまり例がないわね。でも…それだけじゃないの。

慎二 それだけじゃないって？

庸子 なんだかわからないけど、気になるのよ。あの患者さんのことが。それでこんなところまで押しかけてきちゃったってわけ。ごめんね、せっかくの休みなのに。いや、いいですよ。ヒマだしね。

庸子 どんな人なの？

慎二 え？

庸子 一緒に住んでるんでしょ？ 籍入れないの？

慎二 …ええ、まあ、そのうち。わかりますかね、やっぱり。

慎二はじめて照れたような笑いを見せる。

庸子 この片付き方は男の片付け方じゃないわよ。結婚しないの？
 慎二 いやあ…しますけど。稼ぎが追いつかないもんで…
 庸子 しちゃえばなんとかなるわよ。

慎二 連城先生…でしたよね。
 庸子 ええ。

慎二 結婚してるんですか？
 庸子 いいえ。こんな仕事してると、忙しすぎて相手を見つかる機会もないし。

慎二 そりゃあお互いさまですけどね。

庸子 でもちゃんと相手みつけてるじゃないの。どうやって知り合ったわけ？ 合コン？
 慎二 いや…現場で…

庸子 は？

慎二 見つけたっていうか、運んだんですよ、彼女を。

庸子 そうなの！

慎二 あんまり体、丈夫じゃないんですよ、あいつ。

庸子 なんかドラマチックじゃないの、それって。

慎二 ここ、もともと彼女がひとりですんでたんですよ。で、風呂ないでしょ。

庸子 ああ、うん。

慎二 銭湯でね、倒れたっていうんで、呼び出し喰らったんですよ。それが彼女ですって。

庸子 銭湯で？ それって…

慎二 イキナリですよ。生まれてはじめて女湯に入りましたね。

庸子 はあ…

慎二 普通、脱がせるのに苦労するんだろっけど、俺の場合最初にまず着せるところから始まりましたから。

庸子 …へえ…なんか…素敵な出会いじゃない。

慎二 どうかわからないですけど…それが縁でこうなっちゃったんですけどね。

庸子、クスクスと笑う。
 慎二も照れくさげに笑っている。
 ややあって、

庸子 長居しちゃってごめんなさいね。もう行くわ。

慎二 ええ。

庸子 どうもありがとう。話聞かせてくれて。

慎二 いいえ。

庸子 それじゃ、彼女によろしくね。

慎二 …。

去りかける庸子に慎二が口を開く

慎二 そっいえば、ひとつだけ…

庸子 ん？ なに？

慎二 あの人運んだとき…何も持ち物はなかったみたいだったけど…

庸子 ええ、そう聞いているけど。

慎二 あの人のかどうかわからないけど、今思つとあの雑誌はあの人だったんじゃないかな…。

庸子 雑誌？

慎二 倒れていた場所のすぐわきに写真週刊誌が落ちてたんですよ。今までそこを讀んでたっていうように、ページが開いてて…

庸子 写真週刊誌？ フォーカスみたいなの？

慎二 (頷き) もちろんこっちはそれどころじゃないから、そのままにしてきちゃいましたけど…。俺、ちょっと同じ号買ってたから…

慎二、奥へ行って雑誌を手に戻ってくる。

慎二 ああ、捨ててなかった。…これですよ、確かにこの号でした。

庸子 (受け取ってめくってみる) …どのページが開いてたの？

慎二 いやあ、申し訳ない、そこまでは…。

庸子 そう…。

慎二 あの、それ、持っていていいですよ。

庸子 ありがとうございます。

慎二 いいえ。

庸子、退場。

慎二、退場。

病院内(休憩室)

高橋と金沢、会話しながら登場。

高橋 それで、庸子先生どこ行っちゃったんですか。

金沢 さあ。例の患者の身元探しじゃないの？

高橋 そんなことしてどうするんです？

金沢 僕に言われたってわかんないよ。なんか情熱感じちゃってるんだから。

高橋 ふーん。で、七番さん、容態変わらずなんですか？

金沢 ああ。

高橋 もうだいぶ経つじゃないですか。

金沢 回復の兆候はないね。

高橋 でも脳波があるんですよ。

金沢 あるね。なかつたら脳死だよ。

高橋 かなり珍しい状態なんじゃないですか？

金沢 そうだな、珍しいよ。大脳皮質だけがこும்しつこく生き残るってのは。第一脳血流はほんのかすかになっちゃまって。大脳皮質は酸素不足には極端に弱い。最近の研究じゃ視床下部が一番乏血に強いらしいけどね、大脳皮質は弱い。だから珍しいって言えば珍しい。でもな高橋くん。

高橋 はい。

金沢 だからと言ってこのクランケが助かる見込みがあるわけじゃない。体をコントロールする機能は消失してるんだ。自発呼吸も体温調節もできない。もしこの脳波がなんらかの意識の残存を意味してるとしても、いずれは間違いなく消えていく。

高橋 はい。

金沢 もともと人間は完全にピンポイントで死ぬわけじゃない。レスピレータが登場して、脳が機能停止しても心臓だけを動かしておけるようになって、脳死という状態が出現した。でも、心臓停止のあと脳が死ぬまでのほんの短い時間、なにがどんな順序で起こっているかなんて、誰も知りやしないし、今まで問題にもならなかった。どの瞬間に人間は本当に死ぬかなんて、今まで決まっていなかったし、決める必要もなかったんだよ。

高橋 ええ。
金沢 だから七番のクランケがああ脳波の向こうでなにかを思考したり、感じたりしていたとしても…

高橋 …。
金沢 それは存在しない思考だし、存在しない感覚なんだ。…少なくとも今の医学にとってはね。

高橋 うーん。
金沢 なによ。

高橋 でも存在してるけど知りようがないってことと、存在しないってことは…
金沢 違う？

高橋 そんな気もするんですけどね。

金沢 わかるよ。しかし君も意外とロマンチストだな。

高橋 そうですかね。
金沢 だから今の医学にとってはってことさ。脳波は脳が電氣的に活動しているってこととの間接的証明でしかない。脳波でわかることなんてそれだけのことなんだ。逆に、脳波が消えたから主観的意識がないなんてことは最初からこれっぽっちも証明できない。

高橋 ええ、それはわかります。

金沢 だからさ、ちょっと…心配なんだよ。

高橋 なにが？

金沢 庸子先生が、その証明できない何かにとっつかれちゃったんじゃないかって。
高橋 …。

しばし黙ってもの思いにふけるふたり。

その沈黙を破るポケベル音。

ふたり同時にポケベルを覗き、切り、ため息。
ふたり退場。

また別の部屋。ネズミ講の男、田代の部屋である。

田代が登場。続いて女(澄江)が登場

(この女が実は連城澄江であることは隠しておく)

女(澄江) …それでその探偵、なんだって？

田代 連城の娘の居場所を探してるってさ。

女 それであなたなんて答えたの？

田代 俺は何も知らない。

女 連城家に雇われた探偵…

田代 かどうかわからん。しかしまあ…そんなところだろ。

女 警察には…

田代 届けられないさ。俺はあの連中の性質をよく知ってるんだ。異常なほど見栄っ張り、自分たちが高潔だと信じてる。とくに連城家の連中はそつだ。患者は依らしむべし、知らしむべからず…

女 象牙の塔を守る猟犬…

田代 それが連城つて男さ。ましてや娘は別に誘拐されたわけじゃない、まがりなりにも自分の意思で家を出て行ったことになってる。書置きまで置いてな。そんな身内の恥を外に晒すようなことはしないさ。
あたしが書いたんだけどね、その書置き。

田代、笑う。

女 でも、もうひとりいるんですよ。澄江の婚約者だつていつ…

田代 岩田とかいう開業医だ。

女 そっちはどうなの。娘を探してるんじゃない？

田代 そつだとしても、なにもできやしないさ。

女 ……

田代 ……で？

女 どうするの、これから。

田代 ……もう少し苦しんでもらわないとな、あの連中には。

田代、思いに沈む様子。

女 よつぽど…

田代 ……ん？

女 よつぽど医者に恨みがあるみたいね。

田代 ……君だつてそつじゃないのか？

女 まあね。

田代 連城の娘が家を出たがつてるつていうおいしいネタを俺に振ってきたのは君だ。君も連城に恨みがあるのか？

女 君も…つてことは、あなた医者全体つていうより、連城個人に恨みがあるわけ？

田代 質問してるのは俺だぜ。

女 あいにくとあたしも質問してるのよ。

田代 ……ああ、そつさ。まず連城だ。そして医者連中全部だ。なにもできないくせに偉そつにしているあいつらだ。人の命に値段をつけられると思ってるあいつらだ！絶対に許さない…。俺が…天罰をくだしてやるんだ…

女 ……

田代 ……案内してもらおうか。

女 え…？

田代 連城の娘、澄江が隠れてるところにだ。あんた知ってるんだろ？ 友達のアんたにだけは居場所を教えるつてことだったよな。

女 ええ…でも…澄江に会つてどうするの？

田代 ……行こつ。

田代退場。
暗転。

占い師（瀬田薔薇）の部屋。
 占い師があぐらをかいてすわっている。
 そこへ私服の高橋と大槻静が登場。

大槻 どうもすみません。よろしくお願ひします。

瀬田 どうぞ。お坐りなさい。

大槻 ほら。

高橋 いいよ、俺。

大槻 いいから。当たるんだから。

高橋 もう…

ふたり、占い師に対して座る。

大槻 あの、今日お伺いしましたのは、この人のことなんですけど。

瀬田 …（じつと高橋を見る）瀬田薔薇です。

高橋 はあ…どうも。

大槻 自己紹介くらいしなさいよ。

高橋 ええ？ 占い師なんだからそれくらいわかるんじゃないの…

大槻 マナーの問題でしょ！

瀬田 病院にお勤めですね。

高橋 えっ。

瀬田 研修を終えて三年目。麻酔科に所属していらっしやる。

高橋 ええっ。

瀬田 ときどき人目を忍んで…なにか…ドロドロしたものを…むさぼり喰らっていらっしやる、

高橋 な、なんでそんなことまで…

瀬田 と、そちらの大槻さんから伺っております。

高橋 打ち合わせ済みかい！

瀬田 今日はどのような相談ですか？

高橋 いやあ、僕はたまの休みの日にゴロ寝をして過ごす幸福な時間を奪われて無理やり連れてこられただけなんでよくわかりません。

大槻 なんなのその嫌味ったらしいセリフ。あたしはあんたの事を思ってこうやってねえ…！

高橋 わかったわかった！ とにかく君のアイデアなんだから君が説明しろよ。

大槻 偉そうに…。あのですね、この人、こんなふうに言ってますけど、今凄く自信なくしちやってるんです。

瀬田 ほほう。

大槻 出会った頃はとて希望があつて、キャリアを積んで偉い医者になるんだって燃えてたのに、最近は現実の壁に直面したっていうか…

瀬田 ははあ。

大槻 このままいってもたいしたことにならないんじゃないかって、そんなふう諦めちゃってる感じで…

瀬田 ふむふむ。

高橋 別にそんなんじゃねえよ。

大槻 いーえ、そうです。私にはわかるんです。

高橋 あつそ。

大槻 実際、医者が大変なのは私もわかります。六年間大学で勉強して国家試験受けて、さらに二年の研修、専門医や認定医になる試験を受けるためには臨床六年以上…。

瀬田 ええ。

大槻 それでも開業しないかぎり、世間で思ってるほど給料がいいわけじゃないし。

高橋 だから開業するって言ってんだろ。

大槻 できるの？

高橋 できるよ。

大槻 ホントに今でもそう思ってる？

高橋 …。

大槻 それにもともと根が単純な人だから、この業界が肌に合わないんじゃないかって思ったり…

高橋 人を馬鹿みたいに言うな。

大槻 とにかくこの人がこんなだと私もこの先不安で、それで…

瀬田 よくわかりました。お任せください。…わたしの靈感によれば…

大槻 はい。

瀬田 ひよつとしておふたりはつきあっていらっしやいますね。

高橋 靈感なくたってわかるだろ、それは！

瀬田 ご懸念はまことに^{もつと}尤も。医療に携わる方にとって、現在はまことに受難の時代。特に勤務医の場合、呼び出されれば休みの日だろうと夜中だろうと駆けつけねばならず、患者の数に比べて医者の数が少ないため慢性的な過密スケジュール。おまけに給料もそこそこ。

大槻 ええ。

瀬田 開業できれば万事OKかといえはそうもいきません。開業となれば商売ですから流行り廃りは世の常。病院勤務と違って雨の日、風の日、暑い日、寒い日、給料前には患者は来ない。一人一回単価が薬剤込みで三千五百円程度として、三十人診て十万円。月二十日勤務で二百万の売上。そこから家賃、ローン、医療機器のリース料、給料等さしひくとなんにもなし。休診の日は朝から晩まで十二時間バイトして生活費を稼ぐ。それが現実。…それでもあなた、開業しますか？

高橋 希望を打ち砕くようなこと言うな！

瀬田 たとえばそういうこともありうるということですか？

大槻 やっぱり向いてないんじゃないか？

瀬田 しかし、医療に携わる方には貴い生命の灯^{ともしび}を守るといって、なにものにも換えがたい精神的満足があるのではないでしようか？

高橋 …まあ…そりゃあ…

瀬田 とはいえ今は医療倫理そのものが揺らぎ、社会も以前ほど医者を敬ってはくれない。ヘタを打てば即訴えられる。つらい。

高橋 あんた上げたいのか下げたいのかどっちなんだ！

瀬田 上げるも八卦下げるも八卦。

高橋 もういいよ！ 俺帰るぞ。

大槻 あ、ちよつと待ちなさいよ。

高橋 だいたいこんな説教じみたこと聞きにきたんじゃないだろ。当たり前のことしか
言わねえじゃねえか、この人。

大槻 ちよつと、失礼でしょ。

高橋 靈感ていうならもつとびっくりするようなこと言ってみろってんだ。

瀬田 ちよつと。待ってたら！

瀬田 よろしいんですか？ びっくりするようなことを申し上げても。

高橋 なにが。

瀬田 人目を忍んでむさぼっているのは流動食だけではない…。

高橋 …。

瀬田 高橋さん、現実の憂さを紛らわすために幻想の世界に遊んでも、いずれ人は現実
に戻ってこなければならぬ。今のうちですよ。

高橋 なんだよ…なに言ってるんだ、あんた…

瀬田 今はちよつとした気晴らし程度でも、深みにはまれば戻ってこれなくなりますよ。

高橋 ……うるさいよ…

大槻 ちよつと、直人？

高橋 うるせえよ！

高橋、走って退場。

大槻 あ…

瀬田 だいじょうぶ。彼はまだ戻ってこれます。

大槻 …。

瀬田 あなたがじょうずに戻してあげて。それはあなたにしかできないことだから。

大槻 あの…彼…

瀬田 麻酔科の先生だったわね。手近にあるものについ手を出しちゃう性格のかな？

大槻 ええ…私の時もそうでした…いや、そんなことはよくて…え、じゃああの人ま

さか…

瀬田 まだ本格的に依存してるわけじゃないわ。だからショックをつけないで。

大槻 ……なんてバカなんだろう…麻酔科の医者が…薬に手を出すなんて…

瀬田 彼をあまり責めないで。よく話し合って。いい？ 私の見たところでは、まだ
じゅっぶん間に合うから。今日彼をここに連れてきたのはあなたのお手柄よ。

大槻 ホントに…ホントに間に合ってますか？

瀬田 私を信じなさい。

大槻 はい…。はい！

大槻、頭を下げると出口に向かう

出口に黒メガネの男(海老沢)が登場。

大槻と鉢合わせしそうになる。

大槻 ……あ。

海老沢 ああ。お客さんだったんだね。すまない。

瀬田 ちよつと終わったから。

大槻、海老沢に頭をひとつさけて退場。

海老沢 なんだい？ ちょっと涙ぐんでたけど、恋愛関係かな？

瀬田 病院関係よ。

海老沢 へえ。君、得意分野じゃないか。

瀬田 最近多いのよ。流行かしら。

海老沢 どんな相談だい？

瀬田 駄目、お客さまのプライバシーです。

海老沢 夫婦じゃない。

瀬田 夫婦でも駄目なの。それにあなた面白そうな話だとすぐ書きちゃうから。

海老沢 書きゃしないよ。最近はね、時事ネタはとんとこ無沙汰なんだ。

瀬田 そうね。

海老沢 あんまり興味もないしね。情報が出回る速度がどんどんあがってるから、目新しい話の鮮度がすぐ落ちちゃうんだ。

瀬田 インターネットとかのせい？

海老沢 それもあるけどね、ニュースとか、かわった話とか面白い話とか、消費材として雑な扱いしかしてこなかったんだね、マスコミとか世間全体が。

瀬田 雑って？

海老沢 うん、なんていうかな、ありふれた、どこにでもあるものなのに派手に扱いきたり、大事なことなのに面白半分にしかり上げなかったり…。マスコミだってコミュニケーションのひとつなんだ。マスであることよりもコミュニケーションであることに価値があるはずなのに、そんなこと続けてたら価値が下がっていくのも当たり前だろ？

瀬田 ふうん。でもあなたもインターネットでなんだかチマチマやってるじゃないの。

海老沢 うん。まああれはあれで面白いところもあるから。

瀬田 本にしないで書きちゃったらもったいないって思うけどなあ。

海老沢 いいじゃないか。君の占いの収入で充分食っていけるし。

瀬田 その年でヒモになるつもり？

海老沢 男の憧れだ。

瀬田 あたしのコレはただの趣味。

海老沢 君の霊感は本物だよ。もつと宣伝すればいいのに。

瀬田 いいのよ、趣味なんだからこの程度で。あ、宣伝って言えばこの前の雑誌。フライデーだっけ？ フォーカスだっけ？

海老沢 うん。その話はよそう。

瀬田 雑誌に載るのはいいけど、あの写真なあに？ 香港マフィアの出来そこないみた이었다。もうちょっとマシな写真なかったの？

海老沢 香港マフィアが聞いたら怒るよ。…メシに行こうよ。おなか空いちゃった。

瀬田 着替えてくるね。

海老沢 うん。じゃあ外で待ってるよ。

瀬田、退場。

海老沢、退場。

京子と慎二の部屋

京子登場。

座る。ほつと宙を眺めている。

慎二、コンビニの袋を持って登場。

慎二 ただいま。いやあ、ブルーベリーアンドチョコチップなかったよ。悔しいよ。
京子 …。
慎二 しょうがないから、小倉ホイップアンドピーナッツペースト買って来ちゃったよ。
京子 …。

すわり込んでガサゴソとやりながら。

慎二 いつも思うんだけど、「こういう」「なんとかアンドなんとか」「っていうの最近多いけど、」なんとかオアなんとか「っていうの、ないのな。」

京子 …。

慎二 「オア」のほうが好きだと思うんだけどな。だめかな「オア」。

京子 …。

慎二 …。おい。…おい京子。

京子 (気がつく)(…ん。(慎二を認識してニコリと笑う))

慎二 なんだよ、またぼーっとして。

京子 うん。

慎二 またか？

京子 うん。そうみたい。

慎二 最近多くないか、お前のその癖。

京子 …。そう？…そうかも。

慎二 なあ、いつもいつもしつこいようだけども…

京子 一度病院に行つて見てもらえ？

慎二 …。だってな、もしかしたらなんかの病気の症状かもしれないだろ？

京子 …。

慎二 なんでもなかったらそれはそれで安心できるわけだしさ。…別におまえのこと、

京子 おかしいって言うてるわけじゃないよ。

慎二 うん、わかつてる。

京子 わかつてもらつてうれいす。

慎二 よろこんでもらえてうれいわ。

京子 …。頑固だね、君。

慎二 そう？

京子 そう。

慎二 でも、これって病気じゃないもの。それはわかつてるのよ。ホント。

京子 だけどな、一般的には幻視とか幻聴っていうんだぜ。

京子 子供の頃からずっと、私だけが見てると思つてた。聞こえる音も、感じる息遣い^{ひき}も、他の人には見えないし、聞こえない。最初から区別がついてた。そんな幻視や幻聴つてある？

慎二 うーん…

京子 最近わかつたの。私が見ているのは物語なんだなって。

慎二 物語？

京子 うん。人の頭の中になくなって、人がいなくなれば消えてしまつて、でも確かにそれはそこにあつて、それが…私には物語として見えてしまつただけ…
慎二 よくわからないな。

京子 あたしも。そんなふうに感じるだけ。でも大勢の人なかには無意識にそういうものを感じとって、ほんとに物語を書いている人もいる。

慎二 …俺、超能力の持ち主と暮らしてんのかな？

京子 そんなことないよ。私、普通の女よ。

慎二 冗談だよ。

京子 それに…

慎二 (京子が黙っているの) それに？

京子 ううん、なんでもない。

慎二 なんだよ、言えよ。言いかけてやめんなよ。

京子 それにね、私のこの癖がなかったら、銭湯で倒れることもなかったし、あなたとも会えなかったな、って思ったの。

慎二 …。メシにする？ 先に銭湯行く？

京子 好きなほうでいいよ。

慎二 じゃあ先に風呂行ってくるか。

ふたり立ち上がる。

コンビニの袋を京子が覗き込む。

京子 あら、ブルーベリーは？

慎二 だからなかったの。

といつつ退場。

中沢一恵の部屋。

一恵、再び電話している。

一恵 …だからあ！ ちゃんと状況を説明しなさいよ、状況を。ええ？ いるわよここに。ちゃんと世話してるかって？ 亀とか鳥預あずかかってんじゃないんだから。あの人だって自分の世話ぐらいできるわよ。そんなことよりあんた今どこにいのよ！ え？ 電話口で大きい声だすな？ 大きい声は生まれつきよ！ あのね、昨日あたしのところに探偵とかいう男が来たのよ。高木とかっていうなんか体弱そうなの…え？ わかってるってなによ？ だいたいあんたどこにいのよ！ なに？ なによ、「チャオ」って、どついう意味よ「チャオ」って。日本語でいふと？ ごきげんよう？ バカにしてんの？ あ、ちょっと待ちなさいよ、もしもし？ もしもーし！

電話してる最中に、女(霧子)登場。座る。

一恵 …切りやがった。ったく！

霧子 …。

一恵 あら、ごめんね。うるさかった？

霧子 ううん、全然。今の電話…

一恵 うんそう、あいつ。相変わらず独り善がりでなに言ってるのか全然わかんない。勝手なやつよね。

霧子 親切な人よ、とつても。

一恵 まあ、いいとこのお嬢ちゃんのくせに、けっこつあれで跳ねっ返りよね。

霧子 一恵さんたちがうらやましいな。仲良さそうで。

一恵 あの子の友達って、あたしくらいかもね。

霧子 あたしも仲間に入りたいわ。

一恵 なに言ってるの、もう友達でしょ？ あたしたち

霧子 ……。

一恵 ほらあ、元気出して。あ、それとも具合悪い？

霧子 ううん、今日はとても調子がいいの。

一恵 そう、よかった。ねえ、薬飲まなくていいの？

霧子 まだ平気。

一恵 そう…。ねえ、霧子さん。立ち入ったこと聞いてちゃっていい？

霧子 うん。

一恵 あなたの病気、ホントに治んないの？ 全然可能性ないわけじゃないんでしょ？

霧子 そうね、可能性はゼロじゃないし、治療法もあるんだけど…

一恵 だけど？

霧子 とてもお金がかかるの。

一恵 ……。

霧子 それに、治療法があるって言っても、アメリカではじまったばかりの新しいやり方だから、日本ではほとんど可能性がないの。

一恵 どうな？

霧子 難しいことはわからないけど、機械に腎臓のかわりをさせるのよ。人工透析っていうんだけど。ものすごく高い機械だし、それを使えば生き延びられる人の数にくらべてうんと数が少ないから…アメリカでも限られた人しか受けられないんだって。

一恵 へえ…。くわしいのね。

霧子 岩田先生の受け売り。

一恵 ああ…。

霧子 すごくいい先生。いろんな話をしてくれたのよ。

一恵 まあ、いい人そうではあるわね。

霧子 正直言ってお医者さんにもいろいろいるんだなって思ったわ。一番最初に行ったのはすごく大きな病院だったけど、そこのお医者さんはとても冷たい感じだったから。

一恵 それが連城先生ね。

霧子 有名な先生で、たくさんのお弟子さんみたいな人たちに囲まれてた…最後の頼みの綱みたいになってたのよ、あの人。いろいろ無理して紹介状を手に入れて、私を連れて行ってくれた。でも…治らないって。

一恵 方法はあるのに。

霧子 治すのにはお金がかかる、私たちには無理だって、諦めなさいって言われたわ。

一恵 それ、ひどいわねちょっと！

霧子 それで彼は…

一恵 彼って、田代さん？

霧子 (頷く) 人が変わっちゃったの、彼。…それがちょうど…二ヶ月前…。

明かりが変化する。
異世界が交錯し、現実と交じり合う。
アシャワン、スバコ、セフル。

アシャワン どこだ。
スバコ このあたり…。
セフル なにもいないぞ。
スバコ もうすぐだ、もうすぐ来る…。
アシャワン 見えるんだな。
スバコ 間違いない。女だ。女の姿をしたもの。見届けにくる…。
アシャワン 見届ける？ なにをだ。
スバコ …。
セフル いいのか？ もし相手がドウルグワントだったら…。
アシャワン …。
セフル 我々だけで対抗できるのか？
アシャワン …。

アシャ登場。

アシャ 心配いらななさ。
セフル アシャ！
アシャワン アシャ、あんたが出てきてもらっては困る。俺達はあんたを守らなきゃならないんだぞ。
アシャ なにも危険はないよ。そうだろう、スバコ。
スバコ わからない…。
アシャ わかっているさ。おまえは今言った。現れるのは見届けるものだ。私もそれを感じている。私も…迎えにきたんだ。その女を。

明かりがまた変化を開始する。
祥太が、ノートに向かっている。一心不乱に言葉を綴り続ける。

祥太 そして彼らは待つ。待ちつづける。彼らにとって待つことは苦痛ではない。待つことは彼らにとつての至福だ。なぜなら彼らはずっと待っていたのだから。ツアラトウストラが目覚める時を…。

明かりの変化、そして完全な暗闇。
中央に顔を伏せた女がうずくまっている姿が浮かび上がる。
異世界の服を来た庸子である。
異世界人たちが取り囲むなか、庸子は顔を上げる。

アシャ よつこそ。われわれの世界へ…。

暗転。

高木の部屋。
高木と勝子がいる。
書類をふたりともチェックしている。
勝子は書類を見ながらなにか書き取っている。
勝子は「第三の男」のテーマを鼻歌で歌っている。

勝子 ふっふふ〜ん、ふっふふ〜ん…

高木 …機嫌いいねえ。

勝子 あらっ、そうかしらあ。

高木 別に照れるようなことじゃないだろ。

勝子 高木さんは相変わらずお具合が悪そうで。

高木 俺はこれが普通なの。

勝子 なんで高木さん探偵なんてやってんのかなあ。

高木 悪いかね。

勝子 だってすぐ熱出すし咳き込むしめまいするし下痢するし吐くし寝汗かくし…

高木 君の前で寝汗をかいた覚えはない。

勝子 いないよ普通病弱な探偵なんて。

高木 放つといってくれ。それよりちゃんと見てる？

勝子 見てますわよ。

高木 ニヶ月前近辺だけでいいんだ。それに連城教授が直接診た患者だけ。

勝子 それでもけっこう量があるのよ。ふっふふ〜ん…

高木 なによ、それ。

勝子 ん？

高木 そのふっふふ〜ん。

勝子 第三の男じゃない、主演「市民ケーン」のオーソン・ウェルズ。知らないの？
信じられない。

高木 知ってるよ。

勝子 松竹で公開中。高木さん一緒に行こ！

高木 俺見たもん。

勝子 もう一回見よう！

高木 いいです。

勝子 つれない…よし、しゅっりょう。

高木 見せて。

勝子 はいどうぞ。…よくこんな記録手に入ったわね、しかし。

高木 うん、まあいろいろ嘘ついた。

勝子 あ。

高木 しょうがないだろ、ただ来院記録見せてくれって言ったって無理に決まってるんだから。

勝子 嘘は泥棒の始まりですよ。

高木、勝子メモを見ているが

高木 おい！

勝子 はい！

高木 この、これ、これなんだ？

勝子 ああ、それ、田代雄二。それはね、確かその上の女の人の付き添い。

高木 村岡霧子…。

勝子 そ。ああ、これこれ、紹介状つきで来院。ちょうど二ヶ月前。そのあと二回来て、そのあとはプツッリ。

高木 どんな関係なんだ？

勝子 ただの付き添いとしか書いてないよ。

高木 …あの野郎…。

勝子 なに、その人犯人？ ねえ、犯人？ 連続美少女誘拐猟奇殺人…

高木 問題はだ。

勝子 最後まで言わせてよね。

高木 どこで接点があつたか…。娘は付き合いの範囲も狭い…。自宅と岩田のところを往復する生活。毎日のように岩田の手伝いをしてたんだ…。出会うチャンスが…

あつ。

勝子 おつ。

高木、ガツンと、勝子の頭を殴る。

勝子 あいた。

高木 俺、バカじゃん…。

高木、さっさと退場

勝子 痛いなー！ 自分の頭殴りなさいよ！ ちょっとお！

勝子、資料をまとめて追って退場。

岩田医院。

高木登場。

岩田登場。

高木 岩田！ カルテ見せるカルテ！

岩田 なんだい藪から棒に。

高木 いいから早く！ ニヶ月前。患者の名前は村岡霧子だ。

岩田 ああ。

高木 知ってるんだな…。

岩田 来たよ。そつだな、二ヶ月ほど経つか。

高木 どんな患者だ。

岩田 ただの風邪だよ。うちでは。

高木 うちではってどついうことだ。

岩田 持病があるんだ。腎臓だ。俺はそのほつ主治医じゃないから、つっこんだ診断はしなかったが、あれはかなり悪い。

高木 かなりつてどのくらいだ。

岩田 …長生きはできないだろうな。

高木 …そつか。

岩田 かわいそうだがな。

高木 助けてやらないのか。

岩田 言ったろう、俺は主治医じゃないんだ。それに、誰が主治医でも難しいだろう。移植でもすりゃ別だが…。

高木 移植つてなんだよ。

岩田 腎臓を移植するんだよ。ふたつあるからな。

高木 ホントか？ そんなことできんのかよ？

岩田 アメリカでは相当数やってる。ここ最近だがね。末期症状の腎不全患者のうち半数くらいが、半年間生き延びてる。

高木 ほんとかよ。

岩田 まだ実験治療の域を出ないが…おそらく人工透析と一緒に広まってくだろうな。

高木 助かる見込みあるんじゃないか。

岩田 何十年も先の話だよ。そうなるのは。そのころにや、心臓だって移植可能になってるだろうよ。

高木 …。

岩田 信じられないか？ でも事実だ。心臓移植の実際例はまだないが、技術的には可能だといわれてる。アメリカってのはとんでもない国だよ。

高木 日本でもそうなると思うか？ 腎臓に機械をくっつけたり、心臓を取り替えたり。

岩田 なるよ、たぶん。戦争からこっち、日本がアメリカの技術を取り入れる素早さは折り紙つきだ。だけどな…

高木 …。

岩田 向こうの医者は大変だよ。患者の利益になることを為すべしっていう素朴な目標がグラついてるからな。

高木 どういうことだ。

岩田 わかるだろ？ 移植を受けるほうが患者なら、臓器を提供するほうも患者なんだぞ。医者同士のメリットの対立をどう解決するか、もう助からないという見込みをどこでつけるか、医療の道徳が揺らいでるんだよ、あっちじゃ。

高木 なるほど…

岩田 それを結果だけ、成果だけ取り入れていったら…日本はどうなるかな…

高木 …。

岩田 …おまえ、医療倫理談義しにきたのか？

高木 ああ、そうか。それでな、岩田、その村岡っていう患者。誰かと一緒にきたか？

岩田 いや、ひとりだったな。

高木 それ以来こないか？

岩田 何回か来てそれつきりだ。言ったがもともと風邪薬をもらいにきただけだ。そういえば、澄江さんとは…気が合ってたみたいだったが…

高木 よし、だいたい読めた…。

岩田 高木。

高木 …。

岩田 …高木！

高木 …。

岩田 第三の男、リバイバルで来てるぞ。行くか。

高木 ひとりで行って来い。暢気だなおまえも。

岩田 近所のオバさんが旦那のインキン治したお礼に、券くれただけだ。俺はそんな気分じゃないよ。

高木 心配すんな。もうじき片がつくからな。

岩田 ホントか。

高木 嘘は必要なときにしか吐かん。じゃ。

岩田 無理すんなよ！

高木 あ…券はもらってくよ。

岩田 気をつけるよ！…うがいしろよ！

高木、映画のチケットをヒラヒラさせ退場。
岩田退場。

病院、休憩室。

庸子登場。雑誌をじつと読んでいる。

金沢、登場。

金沢 …。

大槻、登場。

大槻 あら。

金沢 おお、大槻さん。もう忙しくてしょうがないよ。高橋くん病欠しちやってるしさ。

大槻 ええ…そうですね。

金沢 庸子先生は…あの調子だし。高橋くん病欠だし。

大槻 連城先生なにしてるんです？

金沢 さあ、ここんとこずつとアレ見てるよ、ヒマさえあれば。

大槻 真剣ですね。

金沢 真剣だよ。高橋くんは病欠だよ。

大槻 高橋くん高橋くんてしつこいですねさつきから。

金沢 うん。ところで大槻さん、高橋くんだいじょうぶなの？

大槻 え？ なんて私が…

金沢 まあた。隠さなくていいでしょ。みんな知ってるんだから。

大槻 えっ。

金沢 ずっとつきあってるでしょ。

大槻 ああ、そのことですか…。

金沢 他になにがあんの。

大槻 いえ。

金沢 風邪？ 看病してるの？

大槻 ええ、まあ…でも大丈夫です。ずっとよくなっています。もうすぐ、戻ってきますよ。

金沢 ホントに。

大槻 私を信じてください。

金沢 たのむよ、ホント。忙しくて…

金沢、忙しがりながら退場。

大槻 ……

大槻、庸子の肩越しにそっと覗き込む。

大槻 あー…

庸子 ん。

大槻 いや、なに見てらっしやるのかなあと…

庸子 それがわかんないわけ。

大槻 はあ？

庸子 なに見てたのか…。それとも意味なんかないのか…。

大槻 ……

庸子 わからん…。わかるわけないか…。

大槻 あ。

庸子がバラバラとめくるページに目をとめ

庸子 なに？

大槻 この人…

庸子 この黒メガネのフーマンチューみたいな人？ 知ってるの？

大槻 ええ…。この前見た人だ。

庸子 コラムニスト・海老沢久治。わが道を往く。…奥さん占い師なんだって書いてあるわね。なんか胡散くさいけど…

大槻 夫婦なんだ。(雑誌を受け取って) ああ、じゃああそこに住んでるんだわ。

庸子 この人、この町に住んでるの？

大槻 ええ、たぶん…。

庸子 そう。…(考えこんでいる)

大槻 どうしました？

庸子、心を決めたようにスタスタと退場

大槻 あの、あれ？ 連城先生？ これは？

大槻、雑誌を持って追って退場。

女(澄江)登場。
田代登場。

田代 ここか？

女 ええ。…だけど、ホントにどうするの。連城澄江に会って…

田代 さあ…まだわからんね。

女 まさか殺すってんじゃないでしょうね。

田代 ……さあ…会ってみて鼻持ちならない傲慢な女だったら…殺しちゃうかもな。

女 そんなのやめてよ。あたし人殺しの片棒なんか担ぎたくないわよ。

田代 ……行こう。

田代、女、退場。
高木、勝子、物陰から登場。

高木 あーしんど…

勝子 だいじょうぶ？

高木 ああ、尾行なんてするもんじゃねえな…疲れる。

勝子 探偵のセリフとは思えん。

高木 つて、君はなんでついてきてんの？

勝子 高木さんが心配で心配で心配で…

高木 退屈で退屈で退屈で…

勝子 心配で退屈で退屈で…あれ？

高木 もうここでいいから、帰ってくれ。

勝子 そんなあ…せっかくここまでできたのに！

高木 いいから。足手まといなんだよ。

勝子 グサ。はつきりした物言いだ。

高木 悪いな…ありがとう。

勝子 …え…いや…

高木 ほら、行って。

勝子 うん…行くけど…高木さん、だいじょうぶ？

高木 ああ。そうだ、これやる（映画のチケットの入った封筒）
なこれ。

高木 重要な証拠品だ、誰にも見せるな。いいな？

勝子 …う、うん。だけどそんな大事なもの…

高木 もちろん自分でも覗き見たらだめだぞ。命に関わるんだ。できるか？

勝子 あう…好奇心で一睡もできずに寝不足で死んだら高木さんのせいだからね…。

高木 できるな？

勝子 うん…。

高木 明日の朝になって、万が一朝日が東から昇ったら、開けていい。

勝子 うん。朝日が…東から…うん、わかった！

高木 よし、いけ。

勝子 うん！

勝子、退場。

ニヤニヤしながら見送る高木。
高木、田代たちの行ったほうへ退場。

海老沢の部屋。

海老沢久治登場。

庸子登場。

海老沢 海老沢です。

庸子 突然お邪魔しまして。連城といます。

海老沢 ま、どうぞ。

庸子 はい。

海老沢 で？ どういったご用件？

庸子 …。

海老沢 込み入ったお話のようだ。

庸子 いえ…。ただ、あまりバカげた話なので…

海老沢 遠慮なくどうぞ。職業柄馬鹿げた話には慣れていきますから。

庸子 ……十日ほど前、私の勤務する病院にひとりの救急患者が運びこまれました。外見三十代半ば、男性、身分を知る手がかりになるようなものは一切持たず道端で倒れていたところを通行人が発見し救急隊員が急行、呼吸も脈も微弱で、病院到着と同時に心肺蘇生措置を施しましたが、力及ばず、脳死に準ずる状態となって現在にいたっております。

海老沢 ……はい。

庸子 その男性の倒れていたところに、この雑誌が落ちていたそうです。ここに、海老沢さんの記事が載っています。

海老沢 そうですね。

庸子 ふとしたことから、海老沢さんがこの町に住んでいらっしやることを知りまして。そして今日私がここに伺った理由は…

海老沢 ……。

庸子 (ちよつと苦笑) それだけなんです。

海老沢 ……。

海老沢、じつと庸子を見ている。

庸子 有名人のところには大勢おしかけてくるんでしょうね、こつこつ…頭のおかしい客が。

海老沢 ……。

庸子 ……でも本当に、それだけなんです。

海老沢 そつか…。

庸子 え？

海老沢 連城さん…連城庸子さん。

庸子 はい…。

海老沢 岩田先生の、娘さん…。

庸子 ……。

海老沢 道理で…。いや、僕もボケてきたのかな。一目見てわからないとは…。

庸子 ……あの、いったい…。

海老沢 私とあなた、十日前にお会いしていますよ。

庸子 ……。

海老沢 私も行ったんです、岩田先生のお葬式にね。

庸子 ……。

海老沢 あなたは喪服を着てらっしゃった。僕はメガネなし。まあわからなくてもしかたがないですね。

庸子 じゃあ…父の…。

海老沢 ええ、お世話になってましたよ。近所の親切なお医者さんとして…。でもそれだけじゃない。

海老沢、立ち上がって話し出す。

海老沢 僕の家内が占いをやってるんです。

庸子 ええ、存じます。

海老沢 お互い、再婚なんですよ。ていつか…ちよつとややこしい話なんです…。僕の最初の妻が、今で言う不倫をしましてね。まあ僕が悪いようなもんです。そのころは書くこと以外はどうでもいいと思ってた…。でまあ、その不倫の相手、これがまた既婚者でして、ダブルで不倫わけです。聞きたくないかな？ こんな陳腐な話。

庸子 いいえ、でもそれが…

海老沢 ええ、で、僕は悩んじゃって、相談相手もない、面倒見のよかつた岩田さんに愚痴をこぼしましてね。

庸子 父に…

海老沢 ええ、お父さんが六十歳ぐらいでまだ立派に開業しておられた。あなたはその頃、あまりあの診療所には寄りつかなくなつたようですね。

庸子 ええ…

海老沢 いや、余計なことでした。すると岩田先生、ある男を紹介してくれました。高木という若い男性で、すこし病弱な感じでしたが私立探偵をしている人でした。その人に任せればうまく収めてくれるから、と言ってね。その通りでした。

庸子 …。

海老沢 結局、僕は円満離婚。相手夫婦も離婚。向こうにもこちらにも子供がいなかつたのが幸いでした。相手のほうの奥さんは、バリバリのキャリアウーマンで仕事中毒だつたそうで、旦那はそれが不満だつた。ちよつと僕のほうと反対の関係ですね。でもその離婚を機会に彼女は仕事を変えた。…臓器移植コーディネーターだつたんですが、すっぱり足を洗つて…趣味の占いを仕事に…。

庸子 え？ それは…

海老沢 そう。今の家内です。結局不倫の片割れどつしが、それが縁でくつついちゃつたわけ。わからんもんでしょ？ 人生なんて。

庸子 …ええ。

海老沢 だから、僕ら夫婦の結びの神ですよ。高木さんと、高木さんを紹介してくれた岩田先生は。そつか…あれは…

庸子 …？

海老沢 そついう意味だつたのかな。

庸子 なんででしょう？

海老沢 その脳死の患者さん…たぶん…高木さんだと思います。

庸子 え？ でも…

海老沢 ええ、今の話はもう十年も前の話です。年があわないです。でも僕はね…

庸子 …。

海老沢 葬式の帰りに会つたんです、高木さんと。

庸子 え？

海老沢 びつくりしました。だつてあの頃とまったく変つていなくなつたんですから。向こうが話し掛けてくるまで、信じられませんでした。若い頃からの親友の岩田先生の葬式を、離れたところから見守っていたんです。

庸子 そんな…

海老沢 彼はこう言っていた。あいつにも、あいつの父親にも、ずいぶん世話になつたけれど、どつやらそれも終わりそつだつて。

庸子 終わる…？ なにが…

海老沢 わかりません。三十歳以上も年が離れてる岩田先生のことを「あいつ」って呼ぶのもなんだか奇妙だった。もっと話したかったが、彼は手を振って歩いてきました。その雑誌を…持っていました。

庸子は立ち上がっている。

庸子 ……そんな…バカけています…あまりにも…。

海老沢 そうですね。確かに。

庸子 信じていらっしやるんですか、本当に。

海老沢 言ったでしょう。私は馬鹿げた話には免疫があるんです。…ちょっと失礼して…
コーヒーでも淹れましょう。

海老沢、退場。

庸子 嘘よ、そんなはずない、そんな人いるはずがない…。でも…。

庸子、海老沢が去ったのも気づかず、独り言を言いつづけてる。

庸子 あの時、叔父さんの話にも…出てきた…高木…確かにそう言った…叔父さんは…なにかを見て驚いて倒れた…叔父さんが見たのは…。

庸子、きびすを返し、退場する。

一恵の部屋。

女(澄江)、登場。

反対側に一恵登場。

一恵 ……あなた。

女 連れてきたわ。田代さん。

女の後ろから田代登場。

田代 あんたが連城澄江さんか。

一恵 ……。

田代 名門のお嬢さんが男と一緒にになりたいばかりに家出とは見上げた根性だ。

一恵 ……。

田代 もっとも俺は連城家が名門だなんてこれっぽっちも思っちゃいないがね。あんたのオヤジ、あの権力亡者の冷血漢。あんただってそう思ってるだろ？ 自分が政略結婚の道具に過ぎないってことを理解したからこそ、こっやって家を飛び出した、違うか？

一恵 勝手なこと言わないで。

田代 違うのか？ そりゃあアテが外れたなあ。あんたならいい同志になれそうだと
思ってたんだが。

一恵 なにが目的なの。

田代 俺の目的は医者どもの目にも見せてやるってことだ。その手始めに連城。あんたがこっちについてくれれば、いろいろ面白いシナリオが書けるんだがな。

一恵 娘が父親を陥れる手伝いなんかするわけないでしょ！ 頭腐ってんじゃないの！
おやおや…思ったより気の強い女だな。そうかい、それならそれで、別のやり方があるんだ。

田代、一恵に近づく。

一恵 寄らないで。痛い目見るわよ。

田代 やれるもんならやってみなよ、ええ？ 名門の箱入りお嬢さん。

一恵 どうしてそんなに医者が憎いのよ。なんで連城の家を狙っわけ？ 恨み？ 誰かの復讐なの？

田代 ああそつだよ。

一恵 誰のよ？

田代 それを知ってどつしよつっていうんだ、ええ？

田代、さらにゆっくり近づく。

女 それをはつきりさせて、思いとどまってもらいたかったのよ。

田代の動きがとまる。

田代 なんのことだ…

女 もついいわよ。霧子さん。

その声で、霧子が登場する。
田代驚愕する。

女 村岡霧子さん。あたしのお友達。

田代 …

霧子 雄二…

田代 …ずいぶんと…

霧子 雄二…バカだね…あたしのためなの？…連城先生があたしを見放したから？…

バカだよ…こんなことして…

田代 ずいぶんと顔が広いじゃねえか、てめえ、なにもんだ！

女 言ったでしょ、あなたに興味があるだけだつて。

田代 ハメやがったな…。連城の娘を知ってるってのは嘘か！

女 知ってるわよ、よく。

霧子 この人が…連城澄江さんよ。

田代、ものも言わずに女（澄江）に飛び掛る。
腕をつかむ。

霧子 やめて！

一恵 澄江！

高木が飛び出す。

もみ合いの末、田代を取り押さえる。

一恵 だいじょうぶ、澄江。

澄江 平気。ありがとう。

高木 …体力遣わすなよ。おい。ちょっと頭冷やせお前。

田代 …畜生…畜生！

床を殴りつける田代、すがりつく霧子
離れる高木

田代 おれは…おれはなんにもできないのか…なんにもできないのかよ！
霧子 そんなことないよ！ そんなこと…！

一恵 あなた…高木さん…？

高木 先日はどうも。芝居つまいね。…ありゃあ、もうだいじょうぶだよ。二人きりにしたほうがいいかもしれない。

一恵 そうね…。

一恵、霧子のそばに行く。

一恵 霧子さん、奥の部屋に…

霧子 うん…そうね、

霧子、田代を立たせようとする

高木 連城澄江さん。

澄江 ええ。探偵さんね。有人さんが？

高木 そう。やつとは古い仲だね。そうでなきゃこんなバカげた話は引き受けない。

澄江 有人さん、元気がしら。

高木 元気なわけないだろう。あんたのことが心配で、あの鉄面皮が人間並みの無表情ぐらいにはなってるぞ。

澄江 大進歩ね。

高木 ひとつ聞きたいんだが、最初から…つまり村岡霧子の話を聞いたときから、田代が脅迫状の主だと思ってたのか？

澄江 いいえ。霧子さんの話では、田代さんは人が変わったようになって、自分にもあまりかまってくれなくなっただけ。もう自分のことが嫌になったんじゃないか、病気の自分を世話するのに嫌気がさしたんじゃないかって、彼女悩んでたのよ。

高木 それで田代のセミナーに出かけていった。

澄江 田代さんの話を聞くうちに、雲行きが怪しくなってきた、これはもしかしたららって思ったの。

高木 それで連城澄江を知っていて、彼女が家出したがってるっていう偽情報を吹き込んだってわけか？ 田代がどう出るかが知りたくて？

澄江 あら、偽情報じゃないわ。これが私の家出ですもの。

高木 それももう終わりだな。ご帰宅のお時間です。

澄江 そうね。独身最後の冒険としてはなかなか楽しめたわ。

高木 気楽な…なに？ 独身最後？

澄江 あたし、有人さんのところに行きます。

高木 しかしそれは、親がどういうかな？

澄江 バカにしないで、親がなんていおうが、私のことは私が決めます。

高木 …。こりゃあいつ、尻に敷かれるな…。

澄江 なにか？

高木 いや…、それじゃあ…行くか…

澄江 ええ、待って、まだ霧子さんが心配なの…

高木、額を押さえ、体を揺らす

澄江 高木さん？

高木、その場に倒れる。

澄江 高木さん！

暗転。

病院。
庸子と叔父・昇一。

昇一　そついうわけじゃよ。それで姉さんは帰ってきた。帰ってきて脅迫状の件の顛末と、今後こついうことは起こらないといつことを父親と母親の前で報告し、その足で岩田さんのところへ行ってしまった…。

庸子

…。

昇一　姉を前にして両親はついにひとことも言葉が出なかった。ただあんぐりと口があ

きつばなしじゃった。わしゃあの時ほど痛快な思いをしたことはなかったよ。おまえの母さんは、ありゃあ…面白い女じゃったわ。姉さんが死んだとき岩田さんがどれだけ気落ちしたか…おまえもおぼえとるじゃろ？

庸子

高木って人はそれから…

昇一

わしゃそれきり会つたらん。岩田さんと連城家の間ではその後も水面下で話し合いが続ぎ…結局…戸籍上は岩田さんが連城家に入った。だからお前も連城家の人間として、医者になる上で有形無形の恩恵を蒙^{こうむ}つとるはずじゃ。だが岩田さんはちがった。岩田の名で開業しつづけ、生涯連城の家の世話にはならんじゃった。あれは…まったく頑固な男だったな…。

庸子

…信じられない。

昇一

本当の話じゃよ。

庸子

ううん。そつじゃなくて…あの人が…あの患者が…その高木って人だなんて…そんな馬鹿なことあるはずがない…

昇一　それならそれでいいんじゃ。信じる必要はない。信じても信じなくてもなにも変らぬ。

庸子

もしそつなら…。あの人の体が特異体質で…老化に対抗する仕組みがあるのなら…それは大変な発見よ。

昇一

そんなことはない。

庸子

そつよ！ 父さんの時代ではわからなかったことも、今なら…

昇一

庸子、岩田さんは知っていたんだよ。

庸子

なにを？

昇一　高木という男が異常な長命であること、老化を遅らせるなんらかの要因があこの男の体の中にあること…

庸子

知っていた…？

昇一、古い冊子を風呂敷包みから出す。

昇一

診療所が懐かしくてのう。うろつろしてこれを見つけた。大量のカルテのなかで、ただひとつ、個人的な記録じゃ。

庸子

…高木さんの…記録？

昇一

岩田さんだけではない。岩田さんの父親の代から書き継がれておる。

庸子

…まさか。

昇一

だが、岩田さんはこれをお前に引き継ごうとはしなかった。自分の代で終わりにした。それがなぜかわしにもわからんが…。ただ岩田さんがそつしたといつことだけは、覚えておくんじゃ。

庸子 これ…私にください。
昇一 おまえの父親のものだぞ。おまえの好きにする権利があるぞ。

その時、病院のチャイムが鳴る。
金沢、登場。

金沢 連城先生。七番。

庸子 どうしたの？

金沢 脳波が止まった。同時に心臓も…

庸子 CPR！

金沢 待てよ！

庸子 もたせるのよ！心拍再開すれば脳波も戻ってくるかも…

金沢 冷静になれ。いいか、あの患者はずっと脳死状態だったんだ。

庸子 脳死じゃないわ。脳波がある。

金沢 脳死に準ずる状態だ。その患者が今は脳波もとまり、完全な脳死状態になったんだ！

庸子 なに言ってるの。脳死判定は六時間以上の状態の継続を前提にしてるのよ！脳波がとまっても六時間たたなきや脳死じゃないわ！

金沢 だが心臓も止まってるんだ。

庸子 だから心肺蘇生処置を！

金沢 そして無理やり心臓を動かして、そのあげく脳死判定して、それでどうなるんだ？

庸子 脳波が戻るかもしれないわ。

金沢 脳波が戻ってもあの患者の脳全体がよみがえることはない。それはわかってるだろ？死んだ脳細胞は生き返らない。

庸子 言い切れないでしょ！

金沢 言い切れることなんかどこにもない！

庸子 …。

ふたりはにらみ合ってやや黙る。

庸子 可能性があるなら…やるべきよ。

金沢 連城先生、これは明らかに過剰延命治療だ。あの患者は実に十日以上も脳死に近い状態をさまよった挙句、脳波と心拍の停止を迎えた。これ以上、われわれのできることはないし…

庸子 …。

金沢 やるべきじゃない。

金沢、退場。

チャイムは一定の間隔で鳴りつづけている。

庸子、退場。

暗転。

明かりがつくと治療台がやや前に出ている。
そこに高木が寝ている。そばに岩田が、冊子になにかを書き込んでいる。

岩田 …気が付いたな。

高木 ああ…。

岩田 最後の最後で無茶しやがって…立ち回りやらかしたんだって？

高木 俺に頼んでよかったろ？

岩田 …ああ。助かった。

高木 …。

岩田 …。なんとかいえよ！

高木 なんだよ。

岩田 そこで黙るとおれがお前に礼を言ったという事実が必要以上に強調されるだろ！

高木 結婚するのか。

岩田 なんだ、藪から棒だな。…ああ。

高木 おめでとう。

岩田 …。

高木 …。なんとかいえよ。

岩田 お返した。

高木 ありやあ、見かけと違って手ごわい女だぞ。まあ、お前にはあれくらいがちょうどいいかもしれんな。

岩田 もうあまりしゃべるな。熱が下がらん。寝^ねれ。

高木 牛や馬みたいに言つな。

岩田 牛や馬のほうがぜんぜん楽だよ。おまえより。抵抗力が平均値より弱いんだ。ちよつとした風邪でもすぐここまで悪化しちまう。

高木 …。おまえのオヤジさんにも世話になりっぱなしだった。

岩田 だからいつも言ってるんだよ、手を洗え、うがいしろ…

高木 …。おまえに息子ができて、それが医者になったら、またこんなふうになるのかな…。

岩田 医者になるかどうかわからん…。それに息子かどうかもまだわからん…。だいたいで子供ができるかどうかはまだ…。いや、それは実はわかってるんだが…

高木 なんだと！

岩田 まあ、いいじゃないか…。

高木 手の早いやつだな…。それであの子あんなに堂々としてたんだな…。

岩田 …。おれはな、連城家には入らん。子供ができて、無理に医者にしよつとは思ってない。医者になってほしい気持ちもあるが…。本人の意思に任せたいと思ってる。

高木 今はそつ言ってもな、いざとなると後継いでほしいと思つよつになるんだぜ。

岩田 そつかもしれん。先のことはわからんが…。だが…

高木 …。

岩田 岩田医院が俺の代で終わりなら、おまえの面倒は…

高木 ああ、いいんだ。

岩田 しかしな…

高木 ここで終わりにしよう。俺とおまえで…終わりにしようぜ。

岩田 …。

高木 俺はおまえがそつ言ってくれると思つてたよ。

岩田 …。そつか。

高木 ああ。

岩田 寝れ。

高木 わかったよ。…なんか音楽でもかけれ。

岩田、立ってラジオのスイッチをひねる動作をする。
「第三の男」が流れる。

神官（斎藤、阿部、小倉、倉橋）真っ白な布をもって登場。
寝台を覆い隠す。
（高木は白服に着替える、岩田退場）

別場所エリア

瀬田 祥太くん。

祥太 あ、瀬田さん。

瀬田 様子見に来たわ。どう？

祥太 ええ、とてもいいです。

瀬田 そう。よかったわ。

祥太 ちゃんと病院にも行ってるし、だいじょうぶですよ。

瀬田 そうよね…。なんせあなたは私が最後に手がけたレシピエントだからね…。なんか気になるのよ。

祥太 でも、ときどき…

瀬田 ときどき？

祥太 小さかったからよく覚えてないけど、僕の肝臓は違うひとのものと取り替えたんでしょ？

瀬田 そうよ。

祥太 …その人死んじゃったんですね。

瀬田 ええ。

祥太 そう思うとなんだか…ときどき不思議な気分になりますね。

瀬田 そうね、そうかもね。…なに書いてるの？ ああ、あのお話ね？

祥太 ええ。

瀬田 また読ませてくれる？

祥太 どうぞ。

瀬田、ノートを受け取って読む。

そばで、読む瀬田を見ている祥太。

京子、慎二。

慎二 おい、ちよつとタンマ。

京子 ほらね、あたしのほうが足速いでしょ。

慎二 こっちは…風呂上りでビール飲んでんだぞ…。

京子 あたしも飲んだもん。

慎二 おまえカルピスソーダじゃねえか…ちよつと…ちよつと休んでこ。

慎二、座る。

京子も隣に座る。

高橋と静。

座っている高橋。

そこへエプロン姿で鍋もってくる静。
鍋を覗き込む。
静、鍋もって引っこ込み、また出てきて高橋の隣に座る。
なにか音楽かける仕草。

田代と霧子。
またあやしげな商品をいじくっている田代。
霧子登場。
健康器具の使い方を実演してみせる田代。
笑う霧子。
ふたりは隣同士に座る。

慎二、高橋、祥太、田代、流れている第三の男に合わせて、へたくそな口笛を吹き始める。

場は暗くなっていく。

異世界との交錯。

そこは神殿である。

中央に寝台がある。

その上に、白い布のなかに、人間が寝ている。
アシャ、異世界の庸子、アシャワン、スバコ。

庸子 ……

アシャ 神だ。われわれはここで、ツアラトウストラの目覚めを待っている。

庸子 ツアラトウストラ…

アシャ そつ…あそこで眠っている。

庸子 あれは…

アシャ おまえが現れて、わたしにはわかった。お前は見届けるものだ。「ツアラトウストラは目覚めてすぐ、傍らの女に微笑みかけた…」その女がおまえだ。

庸子 ……

アシャ そのときお前がなにを語るのか…それをわたしは知りたい…さあ、いくのだ。

アシャワン いくのだ。

スバコ いくのだ。

アシャ 目覚めるツアラトウストラのもとへ。

庸子 ……

神官達が登場し、寝台を取り囲む。

庸子、寝台に近づきかけ、振り返る。

その足元に、父親の聴診器が落ちている。

それを拾う。

庸子 ……答えがわかった。

わたしは…

わたしがなぜ医者になったのか…

わたしは父の…父さんの…見ているものが…見たかったの…

父さんが患者さんを診るあのやさしい眼でなにを見て、聴診器の向こうになにを聞いていたのか…

それが…わたしはそれだけが知りたかった。ただそれだけだった！ 見えないも

の、知るすべのないもの、感じることでできないもの…それが見たかった、知り
たかった……。

庸子、聴診器を手に、寝台に近づく。

庸子の手が白い布をとりぞく。

真っ白な服を来た男が、半身を起こし、目を開ける。

庸子と男は目が合う。

男はにっこりと微笑む。

庸子
(微笑み返して) わたし、あなたを知っているわ。

音楽が高まり、

幕。